
魔法少女リリカルなのはって何？

平民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはって何？

【Nコード】

N7367Z

【作者名】

平民

【あらすじ】

この世から死んでいった主人公の前に現れたのは神と名乗るもので転生させてくれるという。主人公は原作知識もないまま、生きていけるのか？

注意 現実にある団体や場所などとは関係ありません。

さらにこれは作者の妄想の垂れ流しです。処女作ですので駄文です。

注意点（前書き）

何故書いたんだろうか・・・

注意点

この作品を読むにあたっての注意点

○ 作者は厨二病でありそれが嫌な方は戻るなりブラウザを閉じてください

○ この作品は魔法少女リリカルなのはとありますが作者は最近見たばかりなので更新はかなり遅いです

○ 原作が崩壊する可能性があります。それらが嫌な方も戻るなりブラウザを閉じてください

○ ご都合主義、主人公最強が嫌な方も戻るなりブラウザを閉じてください

○ 作者はこれが始めてなので改善点などを教えてくれるとありがたいです（これは別にかまいません）

○ 文がおかしいところもありますので矛盾しているかもしれません。

○ リリカルなのはと在りますがあまり関係ありません

以上の注意点を確認し、作者の妄想を受け入れられる方のみ進んでください

注意点（後書き）

反省も後悔もしている。

プロローグ（前書き）

駄文で拙い文ですがどうぞ

プロローグ

なぜ、ここにいるんだろう。なぜ、目の前に頭が光輝いて髭が異常なほど長いおっさんがいるんだろう

おかしい、何かがおかしい俺は確か死んだはずなのに生きていると思える。

とりあえずなぜ死んだのか思い出してみよう……

病院で入院。原因不明の病気だったかな？

「はあ、暇だ」

そう呟く、入院なんて退屈なだけだろうにご飯はあまりおいしくないし、ああ鬱になる。そう思いつつパソコンをつける何故かパソコンは使ってもいいらしい病院なのに……。とりあえずお気に入りファンフィクション小説を見る

「いいなあ。色々なチートや転生ボーナスもらえて。」

そついい、更新されている物の続きを見る。こういうのを見ているところ、胸が熱くなるというよりもなぜ、ここまで平和な日々を送ってきたのに簡単に能力を把握して簡単に戦えるのかと思う。まあ、現実じゃないからあまり気にしないほうがいいと思う。

このような毎日をもう何年、何十年と繰り返している。元気なときと比べるとただベットにいるか、いないかぐらいしか変わらないと思う。今頃元気だったら中学三年で受験勉強かな？そう思うと嫌になってくる。ああ本気で鬱になりそうだ、いややる気が起きないの方が正しいのか？不意に外をみると夕焼けが病院の周りにある木と重なって綺麗に見えた。味気のない病院の夕食を食べつつパソコンの某動画サイトを見る。もちろんアニメだ。夕食を食べ終わり動画の続きを見る。

眠くなってきた。時計を見る、もう消灯時間だ。パソコンを消し、掛け布団をかぶりそして目をつぶる

電気が暗くなる、消灯時間が来たようだ俺はいつまでこのような毎日が単調で、平凡であり、平和な変わらない無限ループの中でいつまですごしていけばいいのだろうか？だんだんと眠くなってきた。このまま明日も変わらない毎日が来るのか・・・そう思いため息をつく。ああ幸せが逃げていく。もう考えるのはやめよう。俺は鬱になりかけのまま暗い意識の中に落ちていった

そう、俺がいつまでも続いていく平凡で、平和な、単調な作業をこなしていくだけの無限ループの日々が終わるとも知らずに・・・

ブローグ（後書き）

パソコンはもちろんノートパソコンであり病院の設定は自分の勝手な想像です

プロローグ 突然の終わり（前書き）

原作はまだ入りません。なぜならまだまとまっていらないから。

ブローグ 突然の終わり

そう、突然だったのだ。急に目が覚めて気分が悪くなってくる。苦しい、苦しい息ができない。

落ち着け、落ち着くんのだ。よくあるだろう冷静になれ。よくあるというのはたまに気分が悪くなるのだ

しかし、今までのとは比にならないくらい苦しくなった。俺は必死にナースコールを押そうとした。しかし・・・押せなかったいや腕が痺れて動かないのだ。それは、自分のものなのに自分ものじゃないように感じた。

やばい、やばい。これってよくいう詰んだという状況なのか？なぜかそう思った。

でも…これだけは思うく死にたくないくそうだ、死にたくないのだ。俺はまだ14という若いまま死にたくないのだ両親の半分以上、弟の半分以上で・・・

だけど、俺はどこかであきらめていたのかもしれない生きるということ。そう思うと最後の足掻きだが俺は思い切り腕を上げようとしたが痛い、痛すぎる声をあげようとしても空気のヒューヒューという音しか鳴らない

ああ、やっぱりだめかそう思い意識が闇に落ちていった

結果的には助かったのだ。俺は自分が生きている中で一番うれしか

ったことに違いない

親と医者の方が聞こえる

「とりあえず、まあ大丈夫でしょう。」

いやいや、まあってなんだよ。まあって。

「「ありがとうございます。」」

そう、親の方が聞こえる

「後遺症ありませんし。このままいけば助かるでしょう。」

ああ、助かるのか俺はそう思い、意識を闇の中に落としていった。

なぜ、ここにいらんだろう。俺は助かったはずじゃなかったのか？
すべてを思い出し終わり目の前にいるおっさんみたいなおじいさん
が俺の心を見透かしたように言う

「お前は死んだのだよ。」

そう俺に向かい言った。

プロローグ 突然の終わり（後書き）

よくある転生者ですね。テンプレかもしれませんが・・・

1 / 6 少し修正

プロローグ 死んだ先の行方（前書き）

テンションがあがり、宿題も手につかない。しかし俺は今年には終わらせる！
たぶん…

プロローグ 死んだ先の行方

「お前は死んだのだよ。」

目の前にいるおっさん？に、こう言う

「ここはどこなんだ？俺はなぜここにいいのか？」

「一つ目の質問の答えは、ここはお前たちで言う死んだ先の世界。簡単に言うと天国や地獄だ。二つ目はお前が死んだからだ。一つ目で言った通り死んだ先の世界にいるのだから当たり前だろう？」

俺は理解できなかった。なぜ？助かったんじゃないか？そう思うと異常に苛立ってきた。

「そう怒るなよ。死んだものは仕方がないことで願えば帰れるのか？割り切れよ。お前はよく割り切ってきただろう？」

違う、俺は割り切っていない。諦めていたのだ。突然の原因不明の病気にかかり諦めていたのだ。

ここに来た時に死んだはずなのにと思ったのもどこかで諦めていたかもしれないからだ。

よく見る小説の設定のようなところにいたからである。たしか、転生者の物だった気がする

「なあ、そう落ち込むなってこっちも仕方がないんだよ。お前が思っている転生物の書類がとか、失敗してとかじゃないからな。」

落ち込む？そんな顔をしているのか？苛立ちじゃなくて？

「ああ、している。この世の中が信じられないって顔をしているよ。」

それはいきなり死んだといわれたらそうなるだろう。

「俺は……どうなるんだ。」

「このまま消えるか？というよりも、消すんだが。」

嫌だ、嫌だ、死にたくない。その前に親に迷惑を掛けたことを謝らないといけない。

「嫌だ。俺は消えたくない。俺は死にたくない！」

「そつか……よく言った！」

「はい？」

反射的に疑問が口に出ていた

「ここからは俺の管理じゃないからな。ちょっと待ってろ、親父を呼んでくる。」

え？親父？オヤジ？親父って父だよな？英語でfather だっけ？とりあえず、目の前にいたおっさん？の父が出てくるのか？疑問や謎を残したままこの場で考えていたら

「何じゃよ。今アニメで感動の所なんじゃよ？最終回なんじゃよ？」

「うるせえよ。親父がポンポン書類を適当に押すから謹慎食らったんだろ？」

「うるせえとは何事じゃ！最終回で感動の場面じゃよ？そこでめられた者の怒りを思い知れ！」

「あほか。今は神通力は使えないだろう？」

「ふつ。あまいわ！く」「おい。放心しているぞ。」

「ああ、そうじゃな。」

そう聞こえたとき俺はどんな顔をしていたのだろうか？

ブローグ 死んだ先の行方（後書き）

トントン拍子で進めて行きたいです。

ブローグ これからの準備（前書き）

Q こんなに飛ばして大丈夫なのか？

A 無理だと思います。

プロローグ これからの準備

とりあえず現状を確認だ。

俺知らないところにいる なぜこうなったか思い出す おっさん？

登場 なんか消すとか 消えたくないという 親父を呼びに行く
アニメのことで怒るおじいさん登場だな。

とりあえず俺はどうなるのか不安になってきた。

「ふむ、でなんじゃこの子供は？」

「消そうと思ったら消えたくないんだとよ。」

「そうか、でなぜ消さない？」

「面白そうだから。」

あれ？俺って面白いのか？ただ理不尽な死を受け入れたくないから
消えたくないと言った訳で

「で、お主は死にたくないのか？」

「ああ。」

「それがつらいことでもか？」

「どのようにつらいのか教えてもらいたいのか？」

「なぜ敬語じゃないんじゃ？神様じゃよ？最高神じゃよ？」「テンプ
レですね。」「話の途中でしゃべるな！」「すいません」「これだから最

近の若い者は・・・」

なんかぶつぶつ言ってるけれど大丈夫なのか？

「親父、俺まだ仕事残ってるから後よろしく。」

そっつい最初にいたおっさん？は消えた。やはり、ここは俺の知っているところじゃない

「さてと、お主を転生させるがどこがいい？」

「え？これって俺が決めるの？」

「まあそうしたいのじゃが、わしは最高神じゃからとっておきの世界に転生させてやろう。」

「ありがとうございます？」

「なぜ疑問なんじゃ？まあ、聞いて驚け！その名も＜魔法少女リリカルなのは＞じゃ！。」

「魔法少女リリカルなのは？それって何？」

疑問に思ったのでそう返すと最高神が

「な、知らないというのか！あのすばらしいアニメを・・・」

なんか落ち込んでいるけどもう動じないありえないことなんてないのだから

「まあ、その世界に行くためのボーナスのようなチートをやるう！」

「なんでもいいのか？」

「わしを誰だと思ってる最高神じゃよ？最高の神じゃよ？そんなわしに不可能なんてない！」

なんか力説しているんだが疑問を述べる

「何個でもいいのか？」

「ああわしは最高信者からな。その前にたくさん書類失敗してたくさん願いを叶えてやったからな！」

「たくさんつてどのくらい？」

「さあ？わしは数十人じゃったような？」

やばい、この最高神は書類を数十人分失敗して殺したということだよな？

「ああ、ちゃんと土下座して能力をやると思ったら狂ったように叫んで色々能力を・・・って聞いている？」

「土下座ですむものなのか？」

「ああ、許してくれるか聞いたらすごくいい笑顔で許してくれたんじゃないよ。」

「どんな人が来たのかおしえてくれませんか？」

「さあ？みんなその世界に絶望したり諦めていたからなあ。よく覚えておらん。」

「で、その世界に行くためのボーナスはいくらでもいいと？」

「もちろん。で、何を望むんじゃ。」

「そう、だな。まず動物と会話できるように。あと足を早くしてくれ。生活に困らないようにお金をくれ。あとは・・・ないかな」

「なんじゃ？その夢のないものは？もつとき、強く！かぎりなく強く！とかニコポとナデポとかフラグを簡単に立てれるようにとかイケメンにとかないのか？」

「最高神さん、別にいいんです。最強になりたいわけじゃないし。」

「じゃが心の奥では願っていると思うんじゃが？」

「なら、それなら大切なものを守れる力をください。」

「わかった それでいいんじゃない？」

「いや、まだです。向こうの世界にいつでも願いをかなえさせてください」

これは保険だ。向こうで何が起るかわからないし

「了解じゃ。」

プロローグ これからの準備（後書き）

会話が長くなりました

作者も魔法少女リリカルなのはよく知りません
変なところで切ってしまいすみません

ブローグ さらなる準備（前書き）

まだ続くブローグという名の時間稼ぎ

ブローグ さらなる準備

「了解じゃ。」

そう最高神が言うと目の前が光り輝いて…なんてことは起きなかった。少しがっかりだ

「なんじゃ？その不満そうな顔は？まあいいじゃろうその前にこれから転生するための世界は知っているか？」

「魔法少女リリカルなのはという世界だろう？だがしかし、俺はそんなアニメは知らないぞ？」

「そうか…ならばこのわしがお前にどれだけすばらしいのか教えてやろう！」

そついいかなりあつく語り始めた……唾が飛んでくる。はあ鬱だ

〽30分ぐらい経過〽

「〽であるからしてとても！すごく！熱い！アニメなんじゃ！」

〽1時間ぐらい経過〽

「さらに感動もできる！とてもよいアニメなんじゃ！」

〽2時間ぐらい経過〽

「で！そんな！とてもすばらしい！わしの！大好きな！世界に！転生させてあげる訳なんじゃあああああああ！」

とても長い原作と関係ないこのアニメの世界がすばらしいか延々と聞かされた…まあ、ほぼ聞き流したのだが…

「でさ結局どんな世界なんだ？」

「簡単に言うと魔法が使えるようになる！かも知れない世界じゃよ？」

「なぜ疑問なんだよ。」

「そこは努力しだいということだ。」

その後、少し原作について教えてもらいました。ストレージ？やインテリジェント？ユニゾン？などのデバイスという物を使うことなどを知りましたがよく分からないので、デバイスって何だよ。みたいな感じですよ。

「で、欲しくならないか？デバイスを？欲s「別にいいじゃないよ。なんじゃと！どれくらいすごいのか分かったじゃろ？いまなら好きなデバイスで名前も付けられてバリアジャケットのデザインも考えられるんじゃないよ？そんなお得な機会なんてないんじゃないよ？」

「別に最強を目指している訳じゃないし別にいらなと思いますよ？」

「甘い、それは正論じゃがとても甘い考えじゃよ。これから行く世界は死亡フラグがあるんじゃないよ？そんな危険から守るための一家に一台のデバイス！どうじゃ？欲しくなつたじゃろ？」

なぜそんな通販みたいな言い方なのか分からないがいらぬものは
いらぬと思う

「まあそこまで断るならいいじゃろう…（お前の病院生活で考えて
いた痛い妄想をつめこんでやるわ！そして勝手に送ってやる！）」

なぜか寒気がした。こう背中に虫が這いずり回るような生命の危機
に似た何かを感じた

「まあそこまで断るのは初めてじゃしな。他の転生者はやはり狂喜
乱舞しておったのに…」

それは、原作を知りどうすればいいか知っているからでは？いやそ
の前に“他の転生者”と言ったか？

「なあ最高神さん他の転生者って何人いるんだ？」

「まあざつと、わしの書類ミスで数十人…約40人くらいで他の所
からくるのをあわせると数百人は超えるんじゃないかのう？」

その言葉を聞いたとき戦慄した。まずこの神の他に神がたくさんい
て、しかもそれらの神が書類ミスなどでも無意味に死んでいるのか
？その前にポンポンと書類ミスなどで死んでも大丈夫なのか？

「何を考えているか大体分かるんじゃないが書類ミスなんて夜にやらせ
るからミスをするんじゃない！もっと自由時間を！週休五日！これぐら
いくれてもいいと思うんじゃないよ。」

「いや、あなた最高神でしょうそれが休んでどうするんですか？」

「べつつにゝわしはもう人間で言う定年だしゝおじいちゃんだしゝとてもよくできる息子もいるしゝわしは！そう！息子に最高神をゆずって引退したいんじゃああああ！」

「そんな最高神で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない（キリッ）」

「うわぁ決め顔？と言うのか？とても気分が悪くなるような笑顔でサムズアップとかありえない」

「ネタはおいといてだったらなぜゆずらないんだ？」

「まだあいつは頭が固いからのう…」

「すごい遠い目をしているんだが…まぁ確かに固そうだったしな」

「とまあ冗談はここまでにして行こうかのう」

「そついうと最高神がまとうオーラ？みたいなを感じた」

「汝は前世で幸せな顔をして死んでいった！なのに！まだ死にたくないと申すか！」

「はい！」

「返事に自然と力が入る」

「ならば汝を転生させてやろう！行き先は転生者が数多くいる！＜魔法少女リリカルなのは＞の世界に連れて行ってやろう！」

ああ、長かった、とても長かったとりあえず来世にはいけるようだ。
そう思うと

目の前には

すごく息切れをされていて今にも死にそうな最高神が地面に倒れていた

「わし、今、力を使えないんじゃない」

おい今までの感動を返してくれよ

ブローグ さらなる準備（後書き）

しつこいようですが作者は原作の設定などを知りません。
さらにまだぐだぐだ続けていき原作に行くまで時間がかかると
思います。

後、なぜ時間がぐらいなのかは時計がないからです

プロローグ という名の補足と時間稼ぎ（前書き）

プロローグがこんなに長いなんて原作にいつになったらいけるものか

プロローグ という名の補足と時間稼ぎ

前回のあらすじ

最高神（笑）が自分のミスに気づきました

「なあ、さつき最高神（笑）とか思ったじやろう。」

やべ顔に出てたか？

「いや心を読んだのじゃよ。心をな。」

なんか初めて最高神と思った

「なぜ初めてなんじゃ……ちくしょおお！ゲホッゲホッ」

「無駄に叫ぶからむせるんだよ。」

「まあ安心するんじゃない。いまわしの力を一時的に解放してくれるように頼んでおいたから」

あれ？こいつが最高しん「最高神より上があるんじゃないよ……」

「わしの上にも神がいるんじゃないよ。確か世界の管理者とかいわれているの。」

じゃあ力関係はこんな感じか？

>>>>> (越えられない壁) >>>>>>>>>>>> 一般の神

「まあそんな感じじゃのう。それとお前が行く世界は平行世界、パラレルワールドというところじゃなそれだから好きなように原作に介入したり原作ブレイクしていいんじゃよ。それに、お前より先に行ったやつと同じような年齢になっておるから安心せい。」

よかったこれで遅いから相手に攻撃されても逃げれる

「じゃがそれぞれの意志で年齢を変更してからいったやつもいるんじゃないよ。」

あ、やばいそれって詰んだとか死亡フラグというものなんじゃ…

「安心せい。よほど目立たない限り見つかる可能性は少ないじやろう…多分」

「おい、多分って何だよ多分って、それって見つかったら即ゲームオーバーじゃねえかよ。」

「そのためにさっきつくくデバイスがいるか聞いたのに。」

「先に行ってくれよ。」

「お主は原作介入するつもりはないんじゃから安心すればいい。」

そうだった。俺は介入する気なんてないんだから…だがもし、もしものが合ったら？俺が思う言葉にこうある“ポジティブに行動し、ネガティブに考える”とつまり楽観的に行動しながらも、悲観的に物事を考えるということだ。ピンチになったら逃げればいいそう思い考えるのをやめた

「数時間後」

「なあほんとに原作介入して原作ブレイクしないの？」

「しつこい。」

「なあお願いじゃよ」「失礼します。」

「何じゃよ。今説得しているのに。」

「力を一時的に使ってもいいと許可が下りました。」

「分かった。下がってよいぞ。」

「失礼します。」

部下の人？なのかとりあえずこの神から開放されるそう思うとうれしくなってきた

「なんじゃよその嬉しそうな顔は。まあこれでお前も転生できるありがたく思え。」

やった転生できるこれで前世でできなかった事ができる！

「さあこっちに来るんじゃよ。転生させるから。」

そして俺は最高神の言つところに行つた

「じゃあ転生させるぞ。」

「はい。失敗はしないでくださいね。」

「分かっておるでは行くぞ」

最高神がそついうと体に何かが来る

「さあ転生するんじゃ！場所はく魔法少女リリカルなのは>の世界
！」

「ああ言い忘れておった。テンプレと言われたからもちろん赤子の
ときから意識はあるからな。せいぜい黒歴史を作るがいい。ああ、
気味が悪いと言われて捨てられることはないからな。」

最後に最高神はこういい俺を転生させた。最後にいらないテンプレ
という名の最悪のものを残して

ブローグ という名の補足と時間稼ぎ（後書き）

やっと先に進めそうですね

第一話 始まった新しき命

目を開けるとそこには知らない天々「ほら、見て目を開けたわよ。」はい？だれだろうか、知らない女の人と男の人が目の前にいるのだが

「本当か！ああ、かわいいな！流石私とお前の息子だな！」

このテンションの高い人がお父さんになるのか、というよりも前世の父と同じ顔とは一体？

「ちょっとうるさいわよ。」

「はい・・・すみません。」

あ、お母さんも前世の母と同じだな。だが両親が同じだと前世とあまり変わらないような気が・・・
なんか眠くなってきた。そう思い目を閉じて眠りに着いた。

流石にあれは恥ずかしい。なぜなら赤子になっっているので何もできないからだ。恥ずかしい思いをあんなにするなんて思わなかった。オムツを替えられるときが一番つらかった。だって鼻で笑うんだよ？俺のナニを見て笑うんだよ？あれはとてつもない苦痛だった。泣きたくなったがそこは必死にこらえて耐えたよ？泣きそうなのを必死に耐えたんだよ？

ああ、自分の名前は前世と同じでしたね。両親も丸々同じでしたね。ついでに言うと家もおじいちゃんも、おばあちゃんも同じだった。ここまで同じだと軽い今までのことは全部夢で最高神も全部夢だったのか？錯覚を覚えるぐらいに不思議に思った。しかし、今までのものは全部現実であり、前世もその記憶も大切なものなのだ。だからあの記憶や思い出を“夢”と言っ言葉で終わらせたくないのだ。とりあえずこんなことを考える1歳児なんているのか？と思う。離乳食はおいしくなかった。病院食を思い出して泣きそうになった。夜泣きなんてしてないし比較的好かしいほうに入るのだが両親は

「この子、夜泣きしないのよ？とても強い子だと思わない？」

「そうだな。もしかして前世の記憶なんかあるんじゃないか？」

「そんな訳あるわけじゃない。」

「そうだよなあ。」

父よ何故そんなに鋭いんだ？母よ俺は強くない。ただ声を出さないように隠れて泣いているだけだ。

こんな感じで1歳児の毎日は過ぎていった。

第一話 始まった新しき命（後書き）

短いのは自分が長く書けないからです。文才が欲しい。

第二話 七五三で見た転生者（前書き）

原作に行きたくても行けない

第二話 七五三で見た転生者

はい、今私は七五三のために神社に来ています。何故自分のことを私と言っているのかと言うと俺と言うよりも私の方がしっくりくるからだ。だって、三歳の子が“俺”なんていうと他の転生者にはねると思ったからだ。そんなことを考えていると

「ほら、千歳飴だぞ。」

そう言われ千歳飴をもらう。前世だとこれが一番の楽しみだったなあ。着物とか、きつくて動きにくいし、何故神社までくるんだよ、とか思ってたし。千歳飴のためだけに神社に来るといつても過言ではないと思う。前世でも弟の千歳飴をもらって食べていたし。

そんなことを思っていると明らかに場違いなやつがいた。だってさ金髪で両目の色が違うオッドアイ？といわれる目をした子供だよ？おまけにイケメンだしさ、親もいかにも金を持っている感じでさ、両親ともイケメンと美人とかどれだけ願えばあなるんだ？とか思っているとその親子たちの声が聞こえてきた。

「ねえ、おなかがすいた早くご飯食べたい。」

「ちょっと待っててくれよ。ラルフ。」

なるほど。あの明らかに場から浮いておりそれでいて自己中心そうで、自分はすごいやつと思っていそうなのはラルフなのか。もしも本当に転生者だったらどうしようか？

「ん？どうした？」

「えっ、なんでもないよ？きにしないで。」

「ああ、そうかならいんだが。」

危ない危ない、どうやら考え事をしていたらしい。と言うよりも両親はあの親子をみて何も感じないのか？聞いてみよう

「あの子ってすごくない？」

「ん？あの金髪の子か？別に何も感じないぞ？というよりも俺は前が一番だよ。」

と言い、父は私を抱き上げてこう言ってくれた。そのことがとても嬉しいと思った。

“私”は“俺”であり“俺”は“私”であるのだ。つまり俺という前の世界の人でもあり、私というこの世界にいるごくごく普通の一般人なのだ。そう思うと泣きたくなくなった。確かに俺は前の世界のことを忘れられないが今はこの世界の生きる人なのだ。

くラルフSideく

「ねえ、おなががすいた早くご飯食べたい。」

「ちょっと待っててくれよ。ラルフ。」

そう会話をする。何故こうなったのか俺は知っている。そしてこの世界のこと。何故こうなったのか思い出してみよう。

俺は死んだのだ。何でも、神が書類ミスをしたんだとよ。なんてお約束なんだと思っていたがこの際動でもいい、なぜならばこのまま行けば神が出てきて……

「スミマセンデシタ。」

なぜかそういい土下座をする。神という者が地に座り謝ってくる。

「ついつい、うっかりミスをしてしまったのじゃ。じゃからこのことを上の者にばれないように」「他の世界に転生させてくれるんだろう?」「そうじゃ!話が早くて助かるのう。ん?どうかしたのか?」

まじかよ。本当に転生できるのか。やばい嬉しい!笑いがこみ上げてくる!よし!こうなったら転生特典をもらって楽しくくらしてやるぜ!

「で、転生させるための世界なんじゃが魔法少女リリカルなのは>の世界でいいか?」

「ああ、別にかまわない。」

マジかよ。あのアニメかよ！これは嬉しい誤算と言うやつか？

「そしてその世界に何もなしで送るだなんて、最高神としての名が許さないんじゃない！と言う訳で何でも好きなのを言ってみよ！」

「そうだな。まずはすごいイケメンにしてくれ！もちろん金髪のオツドアイで！あとはニコポ、ナデポ、最初から最高の能力値でお願いします。ついでに両親もイケメンと美人で！」

「分かった。最高神にできぬことなぞない！」

そういわれると俺の体が変わっていく。俺のこの自分でも嫌だった容姿が変わっていく。

「よし、では幸運を祈るぞ。デバイスは転生する世界で誕生日にもらえるからな！」

そういわれた俺は光の中に消えていった。とても楽しみだなあ♪よし！原作ブレイクしてやるぜ！

（side out）

「その後の最高神」

「楽しみじゃのうあやつ以外にもたくさん転生者がいるというのに・・・まあ詳しいことを聞かないあやつがわるいんじゃないから仕方ないのう。さてと、アニメの続きでもみようかのう。あやつで何十人じゃったかのう。まあ、後で息子に聞いてみるか。」

第二話 七五三で見た転生者（後書き）

他の転生者ができませんでした。がこれから出てくるとは限りません。ついでに言つと転生者は基本イケメンやらかっこよくだとか願っている。なので簡単に見つけることができると思います。

第三話 プレゼント？（前書き）

これをさ。書いているときクリスマスなんだぜ？

第三話 プレゼント？

七五三から日が過ぎて、クリスマスです。やっぱりクリスマスは楽しくやらないとね！ヒヤッホーウ！

すみません。興奮しすぎたようです。さらに今自分が分からないんです。

前に《“私”は“俺”であり“俺”は“私”》なんて事を言っただけで余計に自分が誰だか……

まあ、それは置いてクリスマスは子供ならテンションが上がるもの！ご馳走にプレゼントにケーキ！考えただけでテンションが上がるぜ！

「さてと、食べるか！」

「……いただきます。……」

父の言葉でご馳走を食べる。

うん。おいしい。というよりもやっぱり前世とほぼ同じ味だとか……

……

ここが本当に転生した後の世界なのか分かります。前世と同じ両親や親戚、同じ家、同じ味、違うことだなんてここが海鳴市ということぐらいかな？

「どうした？食べないのか？」

「食べるよ。」

「そうか。」

このごろ考えすぎて、両親（特に父）このように言われる。母があまり喋らなくなったがただ仕事忙しいだけなんだ。父が家で主夫をやり、母がバリバリのキャリアウーマンと言われるような仕事ぶりなのだ。

「ごちそうさま。」

そっさい、洗面台まで歩いていく。三歳だけど自分で歯を磨くよ？ 恥ずかしい思いはあまりしたくないから。このことを親は「もう自分でできるのか。すごいな。」や「いつの間に一人で・・・」なんて事を言っていたが過保護すぎではないか？と思うぐらいである。とりあえず歯を磨き終わり、布団に入る。お風呂はもう入ったからいいや。そう思うとすぐに布団のところまで行く。やべ、超眠い。だんだん・・・まぶ・・・だが・・・そう思ったとたん深い眠りについた。

「ん・・・ねみい・・・」

目をこすりつつ洗面に行き顔を洗う。・・・よし、目が覚めた。とりあえず冬の水は冷たい。だから、すぐ目が覚める。とりあえず、リビングに行こうか。

クリスマスツリーの近くに、プレゼントらしきものがある。きれいに包装されているよ。なんだろうか？しかしそれよりも隣にある手紙のようなものがとても気になる。すごく気になる。どれぐらい気になるのかと言うと、とても大好きな番組がひたすたに最終回までどんどん伸ばして先がとても気になるような感覚だ。とりあえずこっちは両親のものではないだろう。そう思い手紙を見た。

拝啓

おっすわしじゃよ最高神じゃよ。そちらの世界ではクリスマスと呼ばれる祭りの最中なんじゃろ？だからわしもプレゼントを贈ることにしたのじゃよ。とてもお前にとって嬉しいものじゃろ。じゃから、わしのことを崇めたたえてくれよ！それじゃ。そういうことなのでよろしくたのむ。

敬具

テレフォンカード（最高神様直通）をてにいったぞ！

「・・・いやいらないし・・・」

そう呟いた

第三話 プレゼント？（後書き）

これは例の向こうでも願いを叶えるというアイテムです

第四話 誕生日それは転生した日（前書き）

ちよつとずつとばしていきます。書きたいことが書けない

第四話 誕生日それは転生した日

テレカを手に入れた後、親からのプレゼントは炊飯器でした。なぜだ……

とりあえず、テレカを使うために公衆電話へ、見た目3歳だが精神的なものは大人に近いはず。しかし、受話器に届かない。しかたないからおもいきり跳んだ、だが届かない。

なぜテレカなんだ！電話番号でもいいじゃないか！そう思いながらも悪戦苦闘しつつも必死に頑張る。そうだコードの部分をどうにかすればいいじゃんか……

「もしもし」

「なんじゃ、今いいところなんじゃよ。ラスボスだから早めに用件を言え。」

「なぜテレカなんだよ。」

「電話番号なんて、教えられるか！」

「じゃあなぜそこにつながるんだろうね。」

「最高神を甘く見るなよ。それくらい簡単なことじゃよ。」

「そうじゃなくて、なぜテレカに電話番号が書いてあるのかが知りたいわけなんだが。」

「え？だってそれがないと電話つながらないじゃろうに。」

「さっき電話番号なんて教えられるか！っていったじゃないか。」

「じゃが、テレカを使わないところには繋がらないから安心なんじや。」

「だが、もし落したり、なくしたらどうするんだ？」

「そんなことはないぞ。なくしても気づくと近くにあるように設定してあるからな。」

「こええよそれ、で話は変わるんだが願いは何回まで叶えてくれるんだ？」

「まあ何回も叶えてるとつまらぬ……じゃなくて上の者にばれるから3回が一番可能じゃな。じゃが、話すことは可能じゃから話したいときや質問があるときはかけるといいじゃろう。」

「分かった。3回までだな。じゃな。」

「うむ。」

受話器を置くと、ピーと言う音とともにテレカが出てきた。とりあえず帰るか。親も心配するだろうから。

誕生日当日やっと4歳になった。長かった。それはそれは長い日々だった。

「「誕生日おめでとう!!」」

「ありがとう!」

そっついケーキにある蠟燭を吹き消す。うん、いつやってもこれは楽しい。

「プレゼントは何?」

「これだよ。はい。」

そう言い渡されたのは、料理道具一式（フライパン、包丁、まな板、鍋などそのほか色々）と料理のレシピが載っている本。いやいやこれを貰ってもこれをどうすればいいのやら。何?これで料理でもしろと?一回も作ったことがないんだぞ?

「これで、お前も立派な主夫だ!」

Why?主夫…だと…まだ結婚もしてないし、夫でもないぞ?そして母よ笑ってないで助けてくれよ…

とまあこんなことがあったがそれなりに楽しい一日だった。

第四話 誕生日それは転生した日（後書き）

短い…もっと書きたかったのに…

第五話 誰もが通る黒歴史 前編（前書き）

ほぼ説明回

第五話 誰もが通る黒歴史 前編

誕生日の次の日、目が覚めるとそこには……

どや顔でいる最高神がいた。ああ鬱だ…

「で何？不法侵入で訴えるよ？」

「神じゃから大丈夫じゃ。」

「神だからって何でもやっていいと思うなよ。」

「最高の神じゃから大丈夫なんじゃ。」

「上にさらに他の神がいるうえに息子よりもできないお前がか？」

「ぐぬぬ…まあお前に能力を渡しに来ただけじゃから。」

「ああ、動物と会話できるように。あと足を早くしてくれ。生活に困らないようにお金をくれ。だっけ？」

「そうじゃ。やっと力が戻ってきたからな。」

「そうか。」

「うむ、ではいくぞ……ハッ」

「ん？もう終わりか？」

「終わりじゃよ。あと追加でお前の思い出したくない痛い想像の能力もつけちゃったからな。」

「おい。追加の内容がひどすぎるだろ。」

「まあこのためにお前に能力を渡さなかったからな。後、デバイスに能力を入れようと思ったんじゃが入りきらなかったんじゃが……」

「病院暇だったからたくさん考えていたからな。仕方ない。」

「じゃが、かなり多くないか？その前にどうしてそんなに冷静に対応できるんじゃ。もつと慌てればいいのに。」

「過ぎたことは仕方がない。だってもう能力つけたんだろう？」

「ああ。でもデバイスに入りきらなかったからお前に古代遺産つまりロストログアとして渡すことにしたから。」

「それって持つただけで犯罪とか捕まるとか言っただけじゃなかったか。」

「大丈夫じゃよ。そこら辺は抜かりがない。モーマンタイじゃ。」

「いや持つただけで犯罪臭するんだが。」

「お前以外のものが触ろうとすると痛みが走るようにしてあるからの。」

「わーお。それなんてご都合主義だよ。」

「神にぬかりなし!」

「で、何してくれるんだよ。」

「まあ待て。誕生日プレゼントじゃからな。ここで渡すと危ないから一回お前も上に行くぞ。」

「おい。上ってどこだよ。」

「お前も言ったことあるじゃろ。では逝くぞ。」

「おい行ってくて字が違う気が…」

「で着いたぞ。」

「おいなんで姿が死ぬときと同じになっているんだ?」

「ここ天界じゃから、簡単に言うとなしのプライベートルームじゃよ。」

「もしかしなくても俺死んだ?」

「仮死状態じゃな。じゃからさっさと渡すからの。まずはこの太刀と小太刀、それと木刀じゃな。」

「的確に俺の痛い妄想の産物を出すんじゃないやねえよ。」

「まあ仕方ないじゃろ。これがロストログアに指定されると思うから。あと希少能力もつけておいたからの。」

「だんだん最強設定になっている気がするんだが…」

「でも、そうしないとほかの最強設定の転生者に対抗できないんじゃないが。」

「なら仕方がない。痛いのもつらいのも嫌だからな。」

「じゃが、能力だけに頼るのはいかんから、今からわしの息子と戦ってもらうからな。せいぜい頑張るんじゃない。」

死亡フラグが立った。そう思ったのはこれで何回目だろうか。

第五話 誰もが通る黒歴史 前編（後書き）

話が長くなった。

主人公紹介と人物紹介（前書き）

そつえば名前とか書いてなかった。名前が出るのはまだ先になる
と思います

主人公紹介と人物紹介

主人公

名前 現時点では不明

見た目 黒い髪で普通の顔。簡単に言うと印象に残りにくい。

武器 太刀 小太刀 木刀

性格 ヘタレ チキン ビビリ とだめなものが詰まっている

父

見た目 どこにでもいる人

説明 結婚して主夫になる。前世の方はサラリーマン

母

見た目 普通の人

説明 結婚しても働く人。前世の方は主婦

ラルフ

見た目 金髪で右目が赤 左目が銀 イケメン

説明 最高神の書類ミスで死んでしまった人。イケメンにして、金髪のおツドアイ、ニコポ、ナデポ、最初から最高の能力値を最高神に願った。なぜ黒髪の両親から金髪が生まれてくるのか不明

ラルフの父と母

見た目 父は黒い髪で威厳のある顔でしかもイケメン 母は長い髪で美人

最高神

説明 すごいアニメやゲーム好き。おじいちゃんのような見た目。最高神なのに地位は最高神の中でも一番下で息子に抜かされている。なぜ、息子に最高神の座を渡さないのかというと、アニメやゲームを買ったための収入源がなくなるから。

最高神の息子

説明 恐い人でも、優しい人。気まぐれ。とても強い、どれぐらい強いかというと初期から能力が強くゲームだったらレベル1でもクリアできるくらい。

世界の管理者

説明 最高神より上の存在。女の人らしい

主人公紹介と人物紹介（後書き）

主人公設定は出てきたら追加かあとがきで簡単に説明します。

第六話 誰もが通る黒歴史 後編（前書き）

もう大晦日とか。時間が早く過ぎる気がする

第六話 誰もが通る黒歴史 後編

あらすじのようなもの

立った！死亡フラグが立った！でも死んでるんですけどね。

「なんじゃこのあらすじは。」

「心の心境です。」

「まあ死なない程度にがんばりなされ。」

「他人事だな。」

「他人じゃからな。」

「で、俺は誰と戦えと？」

「ああ、この前転生したやつじゃよ。」

「あの子供か。だが戦えるのかよ。一度も戦ったことないだろう。」

「しかし、能力だけに頼ったら技術や能力がいつまでたっても進化しないじゃろう。じゃからお前に頼みたいのじゃよ。」

「分かったよ。親父の頼みだからな。」

そっつい、なにかぶつぶつという目の中の風景が変わった。

「よしじゃあやるか。」

「あもう、なんでそんなにやる気満々なんですか？」

「久しぶりだからな。殺るき満々だから死んだらごめんな。」

「もう死んでるからいいです。」

「よし、よく言った！やはりお前は面白い！」

そう言い、手を前に出す。そうすると手に槍のような棒状のものが出てくる。

「やるしかないのか…」

そう言い俺も貰った小太刀と木刀を構える。想像していたものと同じように右に木刀、左に小太刀を構える。想像と同じならば効果も能力もほぼ同じだろう。

「では、はじめろ。はじめい！」

「先手必勝！」

そっついおっさんが突っ込んでくる。うん、怖ええよ。笑いながら槍を前に突き出しつつ、フンツとかセイツとか乱れ突きやなぎ払いをしてくる。そのたび俺は、オウとかヤベとかいいつつ防戦一方だ。

「どうした？攻めないと勝てないぞ？」

「くそッ！やってやらあ！」

木刀を戻し太刀にする。そのまま太刀を振るう。軽い、これならいける！

「おおおおおお！」

キーンと高い鉄同士がぶつかる音がする。能力がそのまま使えるのなら！

「いけッ」

「む。」

俺が出したのはたくさんの剣。これならかわせない！

「甘いな。」

そっぴいわれると俺は倒れていた。

「能力は強いがまだお前は強くないな。」

そっぴいわれると、急に眠くなってきた。

第六話 誰もが通る黒歴史 後編（後書き）

戦闘描写が難しい

第七話 能力の把握（前書き）

あけましておめでと〜いします

第七話 能力の把握

「でさ、お前は自分の能力と武器をどれぐらい知っているんだ？」

「思い出せるのは、武器はほぼすべてだけど最高神が三つだけで頑張つてといわれたのでこれだけですかね。能力は大体分かります。」

「じゃあ、武器の名前は？」

「魔王の太刀と魔王の小太刀ってなに笑ってるんですか。」

「厨二乙。妄想乙。www」

「ひでえてかキャラ壊れてませんか？」

「これが素の俺だよ。あんな堅苦しいものいつまでも続けられるかッてんだよ。」

「ですよ〜。」

「その木刀は？」

「暁でしたかね？」

「なぜ暁なんだよ。」

「某ボディーガードのゲームがあつてそこからとりました。」

「効果というか能力は？」

「太刀は何でも切れる。小太刀は何でも防げる。木刀は折れないし、鉄でも切れるというより太刀と小太刀の効果を半分ずつだった気がします。」

「やはり妄想だな。お前矛盾という言葉を知っているか？」

「それぐらい知ってますよ。そもそも太刀と小太刀の切れ味や能力は思いの力で変わるんですよ。攻めるときは太刀のほうが上になり、守ろうとすると小太刀が上になります。」

「で他にはまだあるのか？」

「ありますよ。どちらかというと希少技能？と呼ばれるものになるというてましたけど。」

「でそれはなんだ。」

「魔王の鎧とロードクラウンですね。」

「なんで魔王なんだよ。もっとほかにあるだろう。」

「魔王って強くてかつこいいじゃないですか。自分の信念の元に戦うとか。」

「すまんが、理解できない。で効果は？」

「ほぼチートのすべての攻撃を跳ね返すと鶴の一声というより催眠や暗示に近いものだと思いますよ。」

「すべての攻撃を跳ね返すとか小太刀いらないじゃないかよ。」

「鎧は基本見えないし、常時展開ともできないから仕方がないよ。」

「そっちの王冠もどいだろう。暗示とか催眠とか使えば簡単に勝てるじゃないか。」

「使うときは限定されるから大丈夫だし、使おうとか思わないよ。ただの飾り。」

「そうか。ならいいんだ。他は何があるんだ？」

「よくあるものばかりですよ。超回復だとか瞬間回復だとか。でも基本は創造力“想像や妄想、空想を現実に創造する”というシンブルな能力ですよ。」

「そ…そうかやっぱりチートだな。」

「仕方ありませんよ。思い出したいくない過去を思い出さないと死ぬかもしれないんですから。」

「他の転生者…か。」

「ええそうです。」

「だが俺の親父だけでなく、他の神もミスで転生させているからな。え、でも同じ世界じゃなくて平行世界パラレルワールドに送ればいいんじゃないか。」「そうは行かないんだよ。同じところに行かせてどうかわるのかを見るために送るのだから。」

「迷惑な話ですね。」

「そうだな。」

「じゃ、帰ります。」

「どうやって帰るんだよ。戻してやらないぞ。」

「大丈夫です。これがあれば。」

「太刀がどうしたんだ？」

「まあ見てくださいよつと。」

「これは…空間を切ったのか？やはりチートというか規格外だな。」

「そりゃもう妄想の産物ですから。じゃ帰ります。」

「気をつけろよ。」

「分かりました。」

そついい俺は元の場所に帰った…どうやら俺以外の人にはこれらの道具は見えないらしい。

第七話 能力の把握（後書き）

これらは実際に黒歴史ノートとよく言われるものに書いてありました。それにしても地の文を書かないほうが楽とか…

武器 能力紹介（前書き）

どうしてこうなった

武器 能力紹介

武器

○魔王の太刀

能力 何でも切れる。たとえ空間だろうとドアだろうと結界だろうと魔法だろうと切れる。ただし思いが弱いと能力もそれに応じて弱くなる。しかし弱くなっても強い。

○魔王の小太刀

能力 如何なる物からも守る。というよりも太刀と相反するもの。やはりこちらとも思いが弱いと守りが弱くなる。しかし弱くても強い。

○木刀 暁

能力 御神木から作られた木刀。太刀と小太刀の能力を半分ずつ使えるようなもの。ただし、思いで労力は変わらないし空間も切れない、守る範囲も狭い。しかし、折れないし切れ味も落ちない。

希少技能 レアスキル

○創造力

能力 想像つまり頭で考えたことを現実に持つてこれる。しかし魔力が必要なのでこのままだと使えない。使えれば圧倒的強さを誇る。

○魔王の鎧

能力 すべてを反射させる鎧というよりもバリアのほうが近い。範囲は魔力によって変わるのでこれも中々使いにくい。普段は自分の周りのみ展開している。効果的にはドラ○エで言うアタックカント、マホカント、吐息返しなど。

○ロードクラウン

能力 別名 魔王の王冠と呼ばれるもの鶴の一声ならぬ魔王の一声。暗示や催眠効果を持つ。しかし、これも魔力がなくては使えない。だが、使うことはない。主人公曰くただの飾り。

○瞬間回復・超回復

能力 これさえあれば普通の傷ならすぐに治る。なぜデメリットがないかというと原因不明の病だったためそれらをなくしたいという願いがあつたため。

武器 能力紹介（後書き）

いつのまにか最強設定に…まあでもデメリットや欠点もありますからね。

設定がかぶっていたら申し訳ない。

第八話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 1 (前書き)

この話は書きたかった。でもうまく書けるか不安。
ここからオリジナルの設定がすこしづつあります

第八話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 1

気づいたらもう五歳になっていた。毎日武器や能力を少しづつ使い、技術や能力などを使いこなせるようになったが魔力関係は使えない。まあ、太刀と小太刀それに木刀にも魔力はあるからそれらから供給してもらえばいいことだし。

「よし、今日も終わりだな。だけど見た目が変わらないし、筋肉がついたようにもおもえないんだよな。」

そう、最高神から能力を貰ったあと毎日親が起きない時間。深夜から夜明けの時間ぐらいまで練習している。魔力がないから魔法が使えないけど結果は使えるとかおかしいこともあった。その前に、レアスキルが何故こんなにあるのかと疑問に思った。最高神がいうには「生き残るためとお前の基本の創造力で次々に創っているから。」と言われた。その後「おそらく“創造力”が一番のレアスキルなのだろうから管理局には気をつけるんじゃないぞ。」とも言われた。

「今日は“サルでも分かる魔法のいろは”初級から上級まで」
でもやるか。」

自分の小太刀とレアスキルで創った結界の中で毎回試しているが、魔力がない魔法として出てくるため魔法ではない物が出てくる。最高神の息子が言うには「“創造力”が働いているから、魔法の形だけ出てくるんじゃないか。」との事

「もう時間か…仕方ない。」

とりあえずもう五歳だ。大事なことから二回言った。もう幼稚園

の中はカオスになっている。転生者と思われる人たちがうじゃうじゃといるのだ。大体が年中組の中にいる。他の年長や年少にもいる。もうみんな転生者は自分の能力をオン・オフで切り替えずにひたすらオンなのだから笑うと悲鳴に似た叫び、女子の頭撫でると顔を赤らめる。ああ、鬱だ。そんな俺は部屋の隅っこに行き体育座りで、最高神の息子さんのオリと話す。名前は念話と一緒に教えてくれた。魔力がないため三つの武具はいつも常備している。軽いからそんなに気にならないし、邪魔にならない。最高神の優しい心遣いだとか

『ああ、もうやだ。この幼稚園』

『そんな事いうならやめればいいじゃないか』

『そうはいかないからやなんだろ』

『それもそうだな』

『ああ鬱だ』

『頑張れよ。俺仕事だから』

『りよーかい』

とこんな感じに親しくなったのだ。いいやつだよなあオリって。愚痴に付き合ってくれるし、仕事もできて強いとかありえない。

とまあ、こんな感じで幼稚園の一日が過ぎていく。授業とかできないよ、だって授業にならないし。

「ある日の日曜日」

「今日は遠くに行くぞ。」

「どこに行くの。」

「山とか海、自然あふれる場所だぞ。ほら準備して来い。」

「分かった。」

とりあえず、三つとも持っていこう。家においておくと不安だし。というより気づいたら近くにあるもんなあ。

ところ変わって車の中

「幼稚園は楽しいか。」

「楽しくないよ。だって、みんな怖いから……」

「そんな恐いのか。」

「みんな目が怖いんだよ。男も女も……」

「そうか……」

ああ、話が續かない……もう寝ようか。

第八話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 1 (後書き)

タイトルの意味は後々出ていきます。

番外 明けましてって昨日だろ（前書き）

注意 この作品は外伝のようなものです
そしてこれは作者の愚痴です。

さらによく分かってません。番号をぶった切りました。
楽しい気分を失いたくない方は見ないほうがいいかもしれません。

番外 明けましてって昨日だろ

あらすじ

作者がぐれました。

「おい、このあらすじってなんだよ。」

「聞いてくれるか？」

「なんでここに居る？そしてここは何処だ。今は家族と自然あふれる場所に行くところだっただろう。」

「聞いてくれるのか？」

「何この無限ループ。オリ助けて！」

「聞いてくれるのか！」

「いや聞かないし。」

「あのな。これは昨日書きたかったんだ。だけでもお正月だからって調子に乗ったのが悪かった。」

家に帰ってさあこの気分で書こうと思ったら「あれ？部屋の様子がおかしい」と思ったら・・・」

「おいどうした。」

「まさかのフィルタリングだよ！まずモ「ピー」やろうと思ったら、不適切サイトだし。このサイと開こうと思ったら、このサイトも不

適切だし・・・」

「さっさと続き言えよ。」

「で、親が勝手に俺のパソコンをいじり、保護の何かを入れたときにフィルタリングを掛けたいらしい。」

でもさ。保護もフィルタリングも必要だけでも！だけでも！急にできなくなるとか！」

「お・・・おう。」

「昨日はいつもなら起きている深夜に寝ていたんだ・・・でも現実には甘くなかった。」

まさかの朝。誰も居ない！チャンスだ！と言わんばかりにパソコンのフィルタリングをどうにかしようと思った。

だが何もできなかった・・・

以前弟がフィルタリングを解除したときのように頑張ったさ。でもできなかった。

で、俺が物に当たるのは悪いと思いながら色々殴ったり蹴ったりしたさ。でもそれもいけなかった。」

「まさか・・・。」

「殴ったら手から血出てくるわ、間接のところの皮剥けるわ、決め付けは蹴ったときに足の右中指がポキッと右がわに曲がるし爪はぼろぼろになってるし足の先の肉は抉れて真っ赤だし絆創膏もはるとすぐに血がにじんで意味がなくなるし、泣こうと思ったたらなに馬鹿やってるんだと思ったたら笑いがとらなくなるし・・・。」

「なんだよ。明らかにお前が悪いだろう。」

「そう思っけど、不貞寝したらもうこんな時間だし。朝の5時におきて馬鹿騒ぎして寝たらもう12時間たってるし。」

「じゃあ何でできてるんだよ。見れないはずだろう？」

「弟が朝の馬鹿騒ぎを聞いて親に言ったらしい。で、パソコン付けたら「何故できる・・・」と呟きながら書いているわけ。」

「そうかならもういいだろ。帰れ。」

「そうだね。もう書き溜めて予約してあるし、一月の最後まで予約あるから・・・」

「勉強しろよ。」

「面倒。そしてやる気なし。これから「ピー」なことや「ピーー——」なことがお前に起こるからな。」

「だが、この作品見てる人がいると思うか？お気に入りにはちらほらあるが、駄文だし、感想ないし・・・」

「いいんだよ。これは作者の妄想の垂れ流しで、糞な文なんだ。それにお前はもともと違う想像のキャラだったんだ。」

「なん・・・だと・・・」

「もともと開示していない作品で書いていたのさ。だが友達が「リリなのって面白いぜ」っていうからだったらと思って書いた。寧ろ断片的なことしか知らないから原作ブレイクだからな。」

「さらっとそんなことを言っつなよ。アホか。」

「アホでもいいのさ。ゴミでも蛆虫でもいい!!」

「なんてマイナス思考。」

「そんなことはおいといて皆さんこの作品『魔法少女リリカルなのはって何?』を見ていただきありがとうございます。」

この先も続いていくと思うのでこんな糞みたいな作品を見ていただいているだけで嬉しいです。

では皆さん、明けましておめでとございます。今年もよろしくお願いたします。」

「でも普通昨日だよな。明けましてって昨日だろ。」

「うるさい!!」

番外 明けましてって昨日だろ（後書き）

はい。最後まで作者の愚痴を見ていただきありがとうございます。
今回出てきたのは、主人公と私、平民でございます。

対話は地の文より楽！これだけは言える！

皆さんにとって今年がいい年でありますように。

新年早々に私みたいに怪我しちゃ駄目ですよ。

第九話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 2 (前書き)

タイトルが悪い意味で詐欺になりそう。

この話はいやな気分になるかもしれませんが、新年早くからのいい気分をなくしたくない方は見ないでください。

しかしこの駄文の妄想の垂れ流しを呼んでいる人はいるのだろうか

：

第九話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 2

そこは自然に囲まれた場所だった。周りを見れば木々がたくさんある場所だった。

「さて山登りでもしながら自然を眺めるか。」

「ええそうね。」

親の話を聞くには山を登るらしい。たまにはリフレッシュでもするかな。

「山登り中」

「お父さんだらしないよ。もっと速く行こうよ。」

「ちょ…ちょっと待ってくれ。」

父が息切れをしながら登ってくる。俺？俺は修行しているからこれぐらいじゃ息は上がらんよ。母は俺と同じくらいに登ってくる。息切れしている父とはまったく正反対で疲れが見えない。

「あなた、運動不足なんじゃないの。」

「何故そんなに余裕なんだよ。」

「取引先に行くときは自分の足で行くのが基本ですから。」

「ああそうかい。」

くさらに山登り中」

「そ…そろそろ戻りませんか？」

「あら。どうしてかしら？」

うわ、今すぐいい笑顔で言い放ったよ。父はすごい悲しい顔してるし、こう…捨てられている犬みたいな懇願しているような顔。

「いいでしょう。」

「ありがとうございます。母上様。」

母から許可が下りた瞬間、いい笑顔になったよ。さっきとはえらく違う。

「じゃあ帰るぞ。」

「分かった。」

そのときだった。何かの視線を感じる。品定めをしているような、ねっとりとした感じだ。父と母には向けられていない。どうやら俺だけのようだ。これが思春期特有の被害妄想というやつか…いやそんなはずはない。まだ続いている。ヤバイこれはヤバイ。全身から嫌な汗が吹き出る。

「どうしたの？顔色悪いわよ？」

「な…なんでもないよ。」

母に強がり言う。恐い、怖い、このような状態を恐怖というのだ

ろうか。その前に一刻も早くこの山から抜け出したい。キモチワルイ視線から抜け出すために。

く下山中く

気づくと嫌な視線は消えていた。しかしまだ鳥肌は収まらなかった。あの視線は何だったのだろうか…思い出すと怖くなってきた。早く帰ろう。うんそれがいい。

く帰り道 車の中く

「ああ、久しぶりに疲れたなあ。早く帰って寝たいよ。」

「その前に夕食を作って寝てくださいね。」

「善処します。」

そんな毎日のようなやり取りをしていた。やはりこう毎日が変わらないことって素晴らしいことなんだよな。非日常よりも日常だよ。身を守る能力があっても使わないように生きて生きたいよな。

でも、そんな小さい小さい願いでも世界は無常に引き裂いてくる。

…そう俺が急に死んだように…

帰り道俺と両親が乗っている車にトラックが突っ込んできた。これを機に俺の人生は大きく歪み、それに応じて俺の生活も何もかもが変わってしまった。

第九話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 2 (後書き)

タイトルの言葉は作者が好きな言葉です。そして、どうしてこうなった。

第十話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 3 (前書き)

この話も嫌な気分になります。注意しましたからね。ああ鬱だ…

第十話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 3

トラックが突っ込んできた。そのときのことはよく覚えている。父が思い切りブレーキを踏みキキーツという耳に残るような高くうるさい音。母が俺を抱きしめてくれたこと。トラックの光がまぶしかったこと。あげればきりがないようなことがたくさんある。しかしこの後の光景を俺は忘れないだろう。

なぜならば…

鼻につくようなガソリンのきついにおい、その中にある血のむせ返るようなにおい、母が俺をかばうようにして…長い鉄の棒のようなものに刺さっていること。そして他の鉄の棒が俺の胸に突き刺さっていることを確認したときの言葉にできないほどの後悔や悲しみに包まれている顔…そして、真っ赤に燃える炎の中で父がミラー越しにこちらを見て母と同じような顔をしていたことを……

結果から言えば俺だけ助かった。

理由は簡単、レアスキルの回復系統だ。超回復で傷の進行及び血の

失血を抑えつつ、瞬間回復で細胞の死を回復していったことだ。さらに人が死ぬときや生命の危機になると生存本能が働くため、いつもよりも回復が早かった。

医師が言うには絶対に死ぬ傷だったのに生きており、回復も早い。とのこと、しかし俺を待っていたのは人の嫌な部分であった。

数日後俺は無事に退院した。お金は口座から引き落としてくれと頼んどいた。だが俺を待っていたのはゴミを見るような冷たい目をしている父の弟と母の姉だった…

そこからが大変だった。葬式をやるための準備、それによる遺産の手続き、俺を引き取るかといったことだ。しかしこの内容はひどく嫌なものだった…

「どうするんだよ！この子供！こいつがいると遺産が貰えないじゃないか！」

「大丈夫よ。こんな子供言いくるめれば大丈夫でしょう。」

そう言い父の弟とその妻がしゃべっていた。キモチワルイ。なんで自分の身内が死んだのに、金の話をしているんだ。また、母の姉も

「あなた！子供が残ってるじゃないの！死んだはずじゃないの！」

「知るかよ！俺が聞いたら死ぬような大怪我で助からないといわれ

「ただだから！」

「なんなのよそれ…人じゃなくて化け物じゃないの！」

「だが、引き取らないと遺産は第一の身内のあの子供にはいるんだぞ。」

「だったら、さっさと引き取って施設にでもいれればいいじゃないのよ。」

と聞こえた。この人たちもキモチワルイ。どうしてこんなことを本人がいる前でいえるんだよ。子供だから分らないってことか。だが、あいにくと中身は子供じゃないんでね。

「おい。どうするこの化け物は。誰が引き取るんだよ。」

そう父の弟が言うと、俺の知らない親戚の人が集まり話し始めた。

「まず、遺産は第一相続者のあの化け物に入る。だから、引き取るのは慎重にしないと。」

「お金は欲しいけど…あんな人じゃない奴誰が引き取るのよ。」

「まったく、嫌なものまで残していききましたねえ。」

「まったくだ。」

「じゃあさ。言いくるめて遺産をあいつ以外の遺族で分けようぜ。」

そう言い終わると母の姉がこちらに来た

「ねえ。僕、両親が死んでつらいのは分かるけれども、遺産つて言うものがあってね。それを分けたいんだけどもさ。あなた要らないわよね！はい決定！」

と一方的に言われて親戚が集まるところでは、やったなとか、これで生活が楽になった。とか詩文の都合のいいようにしゃべっている。ああうるさい。ナンデソンナニタノシソウンシャベツテイルノ？オカシイジャナイカ。ミウチガナクナッタノ二…

「う…るさ…い」

もうなにがなんだかわからない。もういやだ。こんなところ一刻も早く抜け出したい。しかし

「そうだよ！あいつを施設に入れるんじゃないモルモットくて生物研究の被験者にすればいいんじゃないか。そうすればかなりの金もはいるぞ。」

「どこに入れるのよ。」

「薬の被験者や、実験の対象になるところにいけばいいんじゃないか？それにあんな事件なのに生きているのだから有名だろ。」

「それもそうね。」

ああもうだめだ。頭が割れるようにイタイ。前世の体が動かなくなつた時と比にならない位に…

「うるさいんだよ！！金がそんなに欲しいならくれてやる！！！」

だからもう、俺の目の前に二度と現れんじゃねえ！！！」

そう親戚どもに言い放った。いやもう親戚でもなんでもないか。ただの他人。遺産はその手切れ金だと思わせればいい。そう思いながら、公衆電話へ駆け込んだ。

第十話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 3 (後書き)

この話をよんで気分が悪くなったりした方がいましたらごめんなさい。

そしてこれは妄想の垂れ流しです。軽く流す感じでお願いします。書いているとき昼ドラみてたからか…

第十一話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 4（前書き）

どうしてこうなった。そして、原作までいかないという。

第十一話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 4

公衆電話に向かった俺は神への電話をする。

「なんじゃ。今いいところ何じゃが…「いいから、願い事を言う。」
なんじゃよ。そんなに怒って…一回リラックスじゃよ。深呼吸、深
呼吸。」

そう言われたので深呼吸をする。すー。はー。よし

「で願いなんだが。」

「その前になんで、そんなに怒っているのかが分からん。理由を説
明してみるがいい。」

「簡単に言うと、両親が亡くなった。それで、その親戚たちが嫌に
なった。それだけだ。」

「なるほどのう。人の嫌な部分を見たということか。」

「ああ、そして願いだが…“親戚から俺の記憶を消してくれ”」

「またなんでそんなものを…お主を知っている人がいなくなるんじ
やぞ?」

「別にかまわない。家に無断で侵入されるよりましだろ。」

「それもそうじゃな。まあ、わしもわしの息子もお主を知っている
からの。」

「そういつてくれると助かる。」

「ふむ。では行くぞ……。終わりじゃ。そして話を聞くためにこちらに来てもらうからな。」

そういわれると、俺は光に包まれた…

「で、なぜこうなったか。詳しく教えてもらうかのお。」

そういわれたので最高神とオリの前でこれまでのことを話した。山に行ったことから事故にあったことまでを…

「大体分かったんじやが、その親戚は今どうなっているんじや？」

「まあ待つてろよ。親父…お、これだこれ。」

そう言われて見たのはさっきの景色、俺が出たときと何も変わらな
い。いや、変わっているのは俺がいなくなったことにより誰が相続
するかと言いつ合っている。

「なんともまあ…汚いのお。」

「これが珍しいほうですよ。おそらくかなり遺産があるんだろう。
なあ坊主。」

「誰が坊主だよ。確かに働いているのに最低限のものしかなかった

「気がします。」

「む。何故そんなに他人事なんじゃ？なあオリよ。」

「それは俺も気になるな。」

「簡単なことですよ。ロードクラウンで自分に暗示をかけたんですよ。」

「あれはかざりじゃないのか？」

「自分にかけるくらいなら簡単ですよ。だって俺は化け物ですから。」

「なあ、おぬs「あんまり思いつめるなよ。坊主はいつまでも坊主なんだから。復讐や自棄になるなよ。困ったら俺にいつでも念話していいからな。」ちよ、わしが言いたいことをつてか何でオリと念話できるn「ありがとう。オリ。」しかも呼び捨て！？何でこんなに親しいの？何？わしって空気なの？」

いじけてしまった最高神を慰めるため時間がかかった。そして、最高神の名前オリエアと念話を教えてもらった。自分名前を息子につけるとか…と思った。

第十一話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 4（後書き）

何故こうも悲しい事があるのが主人公だろうか…

しかしこれは、もし最高神のオリエアが主人公に能力をやらなければこんなことにならなかった。

その前に、主人公が消えたくないといわずにそのまま消えてしまつたら。などとあげればきりのないような事です。簡単に言くと、欲張ったからこうなったんだと思います。

第十二話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 5 (前書き)

そろそろ原作入りたいなと思う。今日この日
そして今日テレ東でStrikersが放送される…原作行きたい
よ

第十二話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 5

オリとオリエアの好意？厚意？で金の心配はないらしい。しかし、新聞を見せてもらったとき驚いた

＜居眠りでの事故！！トラック激突で一家死亡＞と書かれていた。

「なぜ、俺は死んだことになっているんだ。それに相手は一切悪くないとか。」

「簡単なことじゃよ。死亡届をあいつらが出したからじゃ。まあその死亡届もなかったことになっているがのう。」

「まあ、思いっきり心臓を一刺しですからね。仕方ないといえば仕方ないでしょう。それに能力がほんとにチートじゃないすか。死んだ人が生きているとか。」

「そこが最高神クオリティじゃよ。願いをひとつの間違いなく反映させる、これがわしの最高神パワーじゃよ。」

「クオリティかパワーかどちらかにしろよ。」

「じゃ、クオリティで。」

「ああ、そろそろ帰るわ。じゃあね、また今度。」

「うむ。じゃあ送ってや」「よつと、じゃねー。」「なんで!?!」

「あいつの太刀は何でも切れるらしいぞ？向こうからもこちらに来れるようだし。」

「なんて物をわしは創って渡したんじゃ…」

「後悔しても遅いぞ。坊主は能力も武器も使いこなせるようになっていたからな。」

「いくらか早いんじゃ…」

「もともとあいつの妄想とか想像だろ。だから使い方も知っているんだろ。」

「そうじゃのう。まああいつの世界は元はアニメじゃが、もう崩壊は始まっているからのう。」

「そっちの方が大変だろうに。」

「まあ、これも楽しみじゃから仕方あるまい。それに、あそこをただの二次元だと思っている奴らより、現実を見ているあいつの方が楽しいし。」

「それもそうだな。」

（自宅）

「さてと、どうしたものか。気づいたらもう、来年小学校だからな

あ。
」

そう、ここで運命が決まるのだ。私立聖祥大学付属小学校に行くかそれとも別のところに行くかだ。だが、親は私立のエスカレーターの方がいいとか行ってたしな。ということは、あの遺産は俺の学費？…あ、なみだでできた。ヤバイ、マジ泣きそう。

くしばらくお待ちくださいく

よし、落ち着いた。まあ紹介文見みたいなのに共学と書いてあった。まあオリエアが行っていた崩壊が始まっているんだろっから。仕方がない。とりあえず疲れた。もう寝よう。

こうして俺の人生が変わった出来事が終わった。

俺は…

普通の毎日がいつも簡単に消えることに“絶望”し

簡単に日常が消えてしまうことに“憎悪”し

手のひらを返すように消えていくことに“裏切り”を感じ

自分自身の行動や身勝手に消えることに“憤怒”を感じた

結局、これらも自分勝手なことなのだから仕方ないといえればそれで終わりなのだろう。

第十二話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 5（後書き）

ひとつ原作と違うことが出てきました。そして一区切りが終了しました。

これで原作に進める。

第十三話 代償（前書き）

とりあえず投稿

注この作品は妄想の垂れ流しです。

だから細かいことは気にしないでください。

第十三話 代償

全てのものに代償がある。

それは、物を買うときにお金を払うように。

それは、浮気をした後の離婚だったり。

それは、大きな力を手に入れた事ですべてのものが大きく変わった
り。

あげればきりのないような事だ。

「おい。化け物が来たぞ。」

この言葉を聞いたのは何回だろうか？百回？千回？いやもっと多く
だろう。

何故こう呼ばれるのか。理由は

事故で死ぬような怪我で生き残ったからだ。

どうやら、園のほうには死んだという情報が流れたようだ。だから化け物と呼ばれるんだろう。

これは、仕方がない…

だが、命を狙われるのは別件だろう。

あんな新聞にも載るようなことだったし死亡と扱われていたことから転生者と思われる方から攻撃を受けていた。

まあ、とても弱いものばかりだからな。オリよりも弱い。というより能力のみに頼っているし、同じ能力の人もなくさん来ている。

そもそも固有結界とか心象風景を現実に出すものだろう。だから、使った奴らは驚いていた。

だって、何もない場所なんだぜ。ひとつのものもないただ広いだけの空間。使った奴らはなぜ無限の剣製アンリミテッドブレイドワークスじゃないんだ。とか言ってたかな？

まあ人の噂も七十五日と言われるものだし。まあ無視だな。
とこのような毎日を繰り返していた。

幼稚園に行き、家に帰り、ご飯作って、転生者が来たら撃退して、寝る。

この毎日を繰り返す。まあオリとオリエアとの会話は楽しいからいいけれども。

ある日森に行った。

とりあえず毎日の日課になってしまっている練習をする。

え？戦闘狂じゃないですよ？

イヤイヤ、本当に。戦うのも嫌だし痛いのも嫌なんで渋々やっているだけですし。

できるなら、戦わずに生活出来たらと思いますもの。

「封血結界七重式」

とまあ毎回このような結界を張る。

封時結界と変わらないが違ふところは魔力を使わないところか。

魔力の代わりに名の通り血を使っている。七重なのは、一枚だとすぐに壊れるからだ。七重ぐらいがちょうどいい。名が痛いのは仕方ない。

「今日もぼちぼち頑張りますかね。」

そう言い、太刀と小太刀を構える。相手はオリと瓜二つの人形だ。簡単に言うと自分に暗示をかけて見えるようにしている。痛覚などの感覚もリンクしているから現実的に戦える。

太刀を思いっきり振ると空間ごと引き裂く。やっぱりありえない能力だなあと思いつつ戦う。

幻覚なので絶対に倒れない。やっぱり新技使おうかな。と考えているが技が思いつかない。

そんなことを考えていると攻撃を食らう。その瞬間俺は意識が落ちた。

気づくとそこは大きな自然に囲まれた森だった……

はい。気絶していただけです。結界も壊れてないし一人で新技でも開発しようかな。

創造力で出来ぬもの無し！！！！

といったが中々うまくいかないんだなこれが。まあ太刀一振りであ

たれば一撃で基本沈むからいいかな。そんな事思っていた時俺にもありました。

でも新技だよ？カッコいい技でも地味な技でもいいからバリエーションを増やしたいんだよ。

何で振り回しているだけで相手が引き裂かれるんだよ。もっと業が欲しいよ。

と考えているとそこにある茂みが揺れた。

ビクッと肩どころか全身で表現した俺は悪くない。だってここは結界の中だ。出て行くことは出来ても入ってくることは不可能なんだから

「アハハ。ジョーダンキツイデース。」

なぜかこう喋ることしか出来なかった。まだがさがさと揺れている。これはポケットなモンスター見たいなエンカウントか、それとも竜の探求みたいなエンカウントか。

前者なら捕まえるか逃げればいい。

だが後者の場合は戦うしかない。俺はモンスターマスターでも魔物使いでもないからな。

とりあえず覗いて見よう。そう結論を熱い脳内会議の末出した。

「逃げちゃだめだよなあ。」

そう呟き覗く。テレテレとエンカウントの音が聞こえるかと思っただけ聞こえなかった。

いたのは狐。怪我をしている。

まあ治してやるか。そう思い怪我を治してあげた。

第十三話 代償（後書き）

竜の探求、ポケットなモンスターわかりますよね？
狐は作者の好きな動物です。

第十四話 助けたからって良い事があるわけじゃない(前書き)

まさか全部消えるとか…ないわあ

第十四話 助けたからって良い事があるわけじゃない

あらずじ

怪我をしている狐がいる。どうする？

助ける

助けない

とりあえず怪我をしているので治してあげるか。それに新技の対象になってもらおう。

怪我をしている部分は前足の右、体の背中に切られたような傷、そしてべったりと血の着いたし・っばが・っ・っってアレ？オカシイナナンデシツポガココノツモアルンダ？マダゲンカクヲトイテイナインダツケ？って現実逃避はやめよう。

早くしないとモフモフとした尻尾が血でべったりで駄目になってしまう。

「手をかざしてっ」と

そう眩き傷に手をかざす。そうするとあら不思議！傷どころか血までが消えました。

「ぐおお・・・いてて。」

この技の欠点は、傷を自分に移し変えること。だからこのような場合は自分の右手から血がだらだらと出ており、背中が焼けるように痛い。尻尾はないが足の方がものすごく痛い。

おい。回復系統の能力仕事しろよ。このまま行くと天に召されるぞ。

「あー。服が血まみれだよ。」

とても血の臭いが半端ない。生臭いと言っかなんというか…そんなことを思つと目を覚ましたようだ。

「む。誰じゃ。」

おおつ。すげえ睨んでらっしゃる。怖い怖い。

「自分から名乗るのが礼儀じゃないですか。」

まあ名乗るときは自分からの方が何かといいし

「私は世界の管理者じゃが…お主は何故笑っておる。」

「いやあそんな喋りをする知り合いがいるもんで。」

「その知り合いとは誰じゃ？」

「最高神と言っていたオリエアという方ですよ。」

頭をよぎったのは最高神と名乗っていたオリエアだ。その前にセカイノカンリシャと言つ言葉が…

「ああ、あいつか。いつもミスばかりしており、アニメとゲームが大好きな引きこもりか…で、なぜそいつを知っておる。」

まあ世界の管理者は、オリエアより上の存在だしこの人も上の方絡みだし、本当の事いうか

「転生者ですよ。」

そう言つと目が変わつた。憎しみや侮蔑の籠つた冷たい印象の残る目で睨まれる。俺はMじゃないからなんにも感じないが可愛いと思つてしまつた。

「なぜ、転生者が私を助ける？さつさと殺せばいいだろうに。」

「話の内容がつかめない。だから誰か状況が分かるように説明プリズ。」

「なんで、私を殺そうとしたのに助けるといつているのか。と聞いているだけだ。」

「殺そうとするわけじゃないじゃないですか。とりあえずあそこで覗いている奴は切り捨ててOKですか？」

「お主視えるのか？」

「化け物なんて名前で呼ばれてるんですよ？これぐらい出来ないと。」

「そうか…なら私の味方というのならあいつを追つ払ってくれ。話はその後じゃ。」

「りょーかい」

そう言つと思ひ切りそこまで文字どつり跳んだそして落下する勢いのまま木刀を振り下ろす。ゴスツと鈍い音がした。あつけない…そう思つと後ろから鎖が飛んできた。

「アブねえなあ。」

「何故よけられる。死角から襲ったのに…」

「化け物なめるんじゃないやねえと言うことだよ。」

そう言い終わると同時に太刀で斬った。もちろんその周囲の空間ごと切り裂いたよ？今頃どこか遠くの異世界だろうねえ。

「ほい。終わったぞ。」

「なんともまあ、ぶっ壊れた能力で。」

「仕方ない。厨二病とか言われる思春期特有の考えだから。」

「そうか…」

そりゃこんな馬鹿みたいな能力みたら驚き通り越して呆れるよなあ。

そして話を聞いていると子供を預かることになった。どうしてこうなった。

第十四話 助けたからって良い事があるわけじゃない(後書き)

駄文だし書きたいことが書けない

1 / 5 追記 全部終わったので更新を早めます

第十五話 迷走する本文（前書き）

書きたいこと詰め込んだらすごいことに。でも短い。

第十五話 迷走する本文

あらずじ

世界の管理者から話を聞いたら子供を預かることに……なぜだ

「なぜ、管理者の子供を預かるんですか？俺マダ五歳来年小学生。
OK？」

「大丈夫、中身は大人だろう？」

「いや、でも……」

「四の五の言うな！男なら子供ぐらい育て上げられるだろう。なんだ？動物に欲情でもするのか？」

「それって人としてアウトじゃ……あ、俺って化け物じゃん。」

「なら問題ない。」

「問題大有りですって行っちゃたよ。どうしろっていうんだよ……」

小さい狐を置いて親の狐はどこかへ行ってしまったとき。とかどの昔話だよ。

「帰るか。」

小さい狐を手にしたまま帰る準備をした。

「帰り道」

ふと公園を見てみる。

泣いている子の周りに色とりどりの髪をした子が囲んでいる。
シニールな光景だ。一人の子を金だとか銀、それに赤、青、黒など
といった人たちが囲むとか。

「俺だったら泣くだろうなあ。」

そう呟き帰り道の方に歩いていく。

だって知らない奴に囲まれた挙句、話しかけられるとか泣くどころ
かトラウマ物だよ。

そう思い、心の中で合掌した。名も知らない子よ、ご愁傷様。

そして、俺は小学生になった。飛ばしすぎ？そんな事ない。

第十五話 迷走する本文（後書き）

崩壊してます。何もかも。

そして次は原作前の主人公紹介

紹介文 え？これっている？（前書き）

とりあえず原作突入前の馬鹿すぎる能力の数々と主人公紹介

紹介文 え？これっている？

主人公

見た目 黒い髪で一般的 顔は下の上とか中の下など普通の人と変わらない 印象に残りにくい

性格 基本駄目な奴 でも動物や化け物などと呼ばれるものには真面目に対応する

説明 もう二十五回もやっているのに名前が出てこない主人公。原因不明の病で死んだ後に転生する。そのときの顔はとても笑顔だった。なぜなら、助かると思ったから。能力は本当に異常なほどすごい。これも想像力の力のおかげ。本人は痛いことが嫌い。魔力がないから何かで代わりをしようと考えていたら、欲と血で代用できるんじゃない？と思ったたらできた。このことはいつか説明予定。

武器

○魔王の太刀

能力 何でも切れる。たとえ空間だろうと結界だろうと魔法だろうと切れる。ただし思い（想い）が弱いと能力もそれに応じて弱くなる。しかし弱くなっても強い。本人が成長すると大きさもいい感じな長さになる。とても軽い。ただし、他の人が使おうとすると拒絶反応で痛みが走る。

○魔王の小太刀

能力 如何なる物からも守る。というよりも太刀と相反するもの。やはりこちらとも思い（想い）が弱いと守りが弱くなる。しかし弱くても強い。本人が成長すると大きさもいい感じな長さになる。とても軽い。ただし、他の人が使おうとすると拒絶反応で痛みが走る。

○木刀 暁

能力 御神木から作られた木刀。太刀と小太刀の能力を半分ずつ使えるようなもの。ただし、特殊能力はない。不殺の為にあるが切れ味はすごい。基本これと小太刀で戦う。

レアスキル 希少技能

○創造力

能力 想像つまり頭で考えたことを現実に出すことが出来る。この能力が基本であり、この能力で武器や他のレアスキルが出来た。デメリットは魔力を使うことだが、血と欲で代用できるようにした。

○魔王の鎧

能力 すべてを反射させる鎧というよりもバリアのほうが近い。範囲は魔力によって変わる。見えないので相手からしたら驚く。見えるようにすると、バリアジャケットのように黒く全身が隠せるようなフード付きコートが出る。

○ロードクラウン

能力 別名 魔王の王冠と呼ばれるもの。強い暗示や催眠効果を持つ。魔力でのみ動かため代用は出来ない。しかし自分自身にかけることは可能。

○瞬間回復・超回復

能力 これさえあれば普通の傷ならすぐに治る。デメリット無し。

技

○意志の剣

能力 簡単に言うと射撃形の魔法。一回で十本しか操作できない。しかし、操作せずにそれぞれの剣の意志で動かせばかなりの量を出せる。代償は魔力か欲。意志というより欲のほう合っている。

○瞬間回復 対人用

能力 自分以外の人の傷を治す。代償は自分がその傷を負うこと。

紹介文 え？これっている？（後書き）

妄想の垂れ流しって素晴らしい。ちなみに神からの貰った能力は書いてありません

第十六話 原作突入…って俺原作知らねえ 前編（前書き）

時間軸が飛びました。悪いのは俺じゃない！俺の文才が無くしかも書きたいことを書くからいけないんだ！
ただの言い訳です。

第十六話 原作突入…って俺原作知らねえ 前編

あらずじ

とりあえず小学生になった。

小学生になったのは良いが、私立聖祥大学付属小学校って白い制服なんだよな。汚れが目立つからつらいが仕方ない。

とりあえず、オリエアに言われた話と違うところがある。

ひとつ、なぜか全て共学になっている。

ふたつ、中学になると制服が男が黒い制服になる。女子はそのまま。みつ、学力が足りないとアウトらしい。

三つ目が一番深刻な問題だ。小、中と大丈夫だが高、大とか内容が分かるわけが無い。前世でも中学三年までしか病院で勉強してないし、私立だから応用とか……まあ無理な場合は最悪退学かな？とりあえず現状確認。

小学一、二年と勉強は問題ない。寧ろ今年の三年がきついオリ曰く、運命が決まるとか。

修行は毎回続いている。魔法関連はからつきし駄目だ。使えるのはあの結界だけだ。あの結界も七重が七十に変わったし。

あの管理者の子は元気に育ってます。というか流石に管理者の娘じゃなかった。

魔力保持が俺より上とか……

それに娘といったが活発に動き回る。そして人の姿にもなる。やはり管理者の娘だった。

でも尻尾はモフモフで気持ちいい。尻尾に悪は無い！

よくてお転婆ということだろう。母はあんなに静かだったのに……家のものを人の姿で壊すのも毎日のことだ。ホントどうしてこうなった。

何？修行の時に連れて行つたのが悪いの？あ・・・涙が・・・

とまあ長い感傷に浸ってる場合じゃなかった。

学校は地獄だ。それだけはいえる。

化け物と言われるのには慣れたが、こうみんな髪の毛がカラフルなんです。赤から黒まで、クレヨンとか絵の具並みに種類豊富なんですよ。前世だと黒か茶だったし。

とりあえず、弁当を作りバツクにいれる。

「んー。なにしてるの？」

おっと、破壊神のお目覚めか

「今失礼なこと考えてなかった？」

怒りマークが見えるくらい怒ってらっしゃる。まだ俺より年下なはずなのに俺ぐらいにしゃべれる。

「どうでもいいから、早く顔洗ってこい。それと、狐状態になっておけ。」

「むー。どうして？こっちの方が楽なのに・・・」

「その姿だと連れて行けないだろ。」

実際、動物持ち込み禁止だがそこは抜きなし。あいつが自分自身にステルスを掛けるからだ。

実際俺と手合わせしたときに全くと言って良いほど見えなかった。

彼女曰く神通力だそうだ。まあ魔王の鎧張って待ってれば自滅するんだけどね。

「ほら食べるぞ。」

「いただきます。」

「ちょ、早いつて。」

「食べたもん勝ちだもん。」

そういつつ食べ進めていく。

料理は父が教えてくれたものとレシピ、それに調理器具もある。だから、簡単に作れるのだ。

「ご馳走様。」

そう言い、さつさと歯を磨き制服に着替える。これで四、五着目だろう。全くいじめと言うものはいつになってもきついねえ。

「さてと行くぞ。」

「まってよお。」

「だが断る。」

そうついい、ドアを開ける。後ろからタックルを食らうのは毎回のことだから慣れた。いやあ慣れつつ怖いよ。

うん。狐状態、俺にステルスは効かなくなっている。そんな何回も見せ付けられたら化け物としての能力で解析できるわけで。

「じゃ、行くか。」

こんな感じで毎日を過ごしている。
変わらない毎日だ。

だが、これが壊れるのを俺は知っている。
いつでも終わりは簡単にくるのだから。

第十六話 原作突入…って俺原作知らねえ 前編（後書き）

からっきしって茨城弁なんですネ。知らなかった

第十七話 原作突入… って俺原作知らねえ 後編（前書き）

原作と言っても少し触れるくらいですかね。

第十七話 原作突入…って俺原作知らねえ 後編

徒歩で学校へ向かう。こっちの方がいいし、バスとか乗ると酔うので徒歩が一番だ。

（登校中）

ああやっぱでかいなあ、この学校。

流石、私立だと思う。しかも、ところどころ違う。流石パラレルワールドあつさり崩壊してるぜ。

『そんな事考えてる場合じゃないでしょ。早くクラス分け見ないと』
そんなことを念話で伝えてくる。それぐらい分かってるよ。

「えっと…小澤、小澤っと。」

一組だ…マジか。ここって転生者たくさん居るじゃん。というよりも俺とその他の男子全員なんだが…

げ…29番 高町って書いてあるよ…

オワタ…楽に原作に入らないように今まで別のクラスだったのに…最悪だ。

ほら、みんな可笑しいって。

地面に手を着きorzになってる人と、何か悟りを開いたような人と、すごい嬉しそうな顔をしてダラッシャーと叫ぶもの。どうやら、一組に入れたものと入れなかった人の温度差が激しすぎる。

そもそも、何百と言う人がここに来て落ちていったもんなあ。

初めて小学校受験とか受けたよ。簡単だったが。とりあえず5〜6クラスの一クラス40〜50と言うとても多い数なのだから、そう落ち込まなくても。

教室に來ると空気がヤバイ。

どれぐらいヤバイかというと空気ピリピリ。全体どよーん。そしてそわそわそつつ、目がギラギラと擬音を使うくらいすごい。

戦争でも始めるのかと言う位の気合の入りようだ。何故そんなに気合が入るのか不思議だと思う。

とりあえず自分の席を探す、一番後ろの窓際だ。一番好きな場所なんだよなあ

ガララツと音が聞こえた。そこを見ると金、紫、茶色みたいな髪をした三人組が入ってきた。

そして、男子全員そこを見る。それは、ガバツというスピードで。

「はい、それでは自己紹介していきましょう。」

先生がそういう。しかし、これって必要か？と思ってしまふ俺は協調性が無いのだろうか。

そんなことを考えていると俺の番に

「小澤有弥です。よろしくおねがいします。」

名前だけ言っていればいいだろう。こういうの苦手なんだよ。

『なんでもつと言わないの？』

『面倒だから』

念話で話しかけるなよ。

そして首絞めるな。息でなくなるだろう。

首に巻きつかせたのは失敗だな。そう思う。

そして今日は無事に過ごせた。平和万歳！

第十七話 原作突入…って俺原作知らねえ 後編（後書き）

やっと名前が出てきた。長かった。

何故この名前か？

苗字はテレビでちらっと見えたから。

名前は外を見たら夕焼けで童謡でゆうやけのゆうやで切れてたからです。

しかし夕焼け関係ない名前という。

そして原作は何一つ残らなくなるという崩壊

やっぱり妄想の垂れ流しだね！

第十八話 ジュエルシードってマジかよ…（前書き）

やっぱり文才欲しい。

そしてまた時間が飛ぶ

第十八話 ジュエルシードってマジかよ…

あらずじ

原作？それって何？

かなりの日にちが過ぎた。

その日はみんな（転生者）はそわそわしていた。
なぜだ？

あるものは気持ち悪いほどの笑顔を浮かべ

あるものはぶつぶつと独り言を言う

あるものはデバイスと思われるものに向かってしゃべりかけている
あるものは関係ないという感じでいつも道理の人。

俺は四番目だと思う。

それと、子狐の名前はそのまま九尾にしました。ネームセンスなんてありませんし。

そして、今日から自由散策させてあげることにした。まあ学校つまらないと言われるのも面倒だったし。

「みんなは将来どんなおしごとにつきたいですか。」

先生が言った。

将来か。考えるのも面倒だなあ。今は九尾を育てるのに精一杯だし…
…やっぱり、サラリーマンかなあ。

現実的に考えるともっと他のものあると思うが今はこれぐらいだろう。

キンコンコーンとお馴染みの鐘になる。

「きりーつ、れい、ちやくせーき。」

「ねえ、高町さん。一緒にお昼ご飯食べない？」

毎回これもお馴染みの光景だ。たしか、聖祥美女だっけ？そんな感じで呼ばれているためにお昼はこのように人が集まってくる。毎回よくもまあめげずにトライするよなあ。

そう思いながら屋上のタンク近くに行くため行動する。しかし…

「おい。どこ行こうとしてるんだよ。」

呼び止められた。何だよ、こっちは腹減ってるんだから。

「何だよ。高尾。」

少しいらいらしながら聞く。すると

「お前いつも一人で食べてるよなあ？俺と一緒に食べないか？」

どの口が言うんだよ。いつもお前いじめていたじゃないか。今は止まっているが昔はひどかった。

物が隠されたり、物が壊されたり、一番は制服がぼろぼろになったことだよなあ。

と昔の思い出に浸る。おっと いけないいけない。返事はもちろん「ごめん。俺って化け物だから一緒に食えないや。」

逃げた。簡単に言うとうろしていじめていた奴の顔を見ながら飯を食わなきゃ行けないんだよ。

クラスの女子からは非難の目線を感じる。

そりゃ、カッコいいから女子からしたらうらやましいのだろうが、こちらはあいにくと心は狭いので食べれない。

「何だよ……まあいつでも相談にのるからな！」

ポイントでも稼いでいるのか？あいつは。ここはゲームでも二次でもないぞ。現実だぞ。

その前にどの口が言うんだよ。ちなみにいじめは気づかないようにされていた。流石に結界の中で殴る、蹴るを受けるとは思わなかった。きついのは肉体ダメージが残ることだったかな？回復を気づかれないようにするのが大変だった。

「ああ、鬱になる。飯がおいしくなくなるから考えるのやめだ。」

屋上に来る。よし、誰も居ない。これならと跳んでタンクの近くに行く。ホント化け物だよな。

人の声がたくさん聞こえてくる。そりゃ屋上だもの、くるよなあ。

そんな感じで一日が終わる。

だが今日はこの後、嫌なこと。一部の人は狂喜乱舞するアイテムを九尾は持ってくるのだ。

「で、この青い色した宝石みたいのってもしかしくなくても…」

「うん！ジュエルシードだよ。」

馬鹿かこいつ。なんでそんな物騒なものもってくるんだ！

第十八話 ジュエルシードってマジかよ…（後書き）

どうしてこうなった。ほんとにどうしてこうなった。

第十八話 スピードタイプには防戦が一番（前書き）

タイトルは関係ないと思います

第十八話 スピードタイプには防戦が一番

あらずじ

九尾が厄介事を持ち込んできた・・・あ、胃が痛い

「こら！さつさと元の場所に返してきなさい！」

かなりいらいらしている。泣きそうになっている。一部の人はこれを見て楽しく思っただろうが俺は思わない。多かれ少なかれ俺が喜ぶと思っただろう。

「だ・・・だつて・・・これがあれば・・・願いが叶うんだよ？」

神龍でも呼ぶのか？九個も持つてきやがつて。

「なぜ九個なんだ？怒らないから説明して？」

「私の尻尾と同じ数だよ・・・」

なんで最後だんまりする。

「でどこから取ってきた？」

「森で3つ、海の浜辺でもめから2つ、町の公園の砂場で1つ、家の庭に1つ、残りは貰った。」

「誰に貰ったんだよ・・・」

「知らないおじさん。」

「ハイ。アウトーーーーー！」

知らないおじさんよ。なにやってるんだ。

「でも。話を聞いてくれたらこれあげるって言われたことと、孫に似ているといわれて貰ったよ？」

よかった。何もされてないのか…それなら怒ることも無いかな？

「よかったあ。何かされたのかと思ったよ。」

「心配してたの？」

「当たり前でしょう。親が子の心配をしない訳が無い。」

実際、奇麗事だがお願いされたので引き受けたただけだが…あの人が居ないと転生できなかったわけで…

「えへへ。ありがとう。」

そう言われた。なぜ謝る。そしてなぜ顔を赤らめる。

おかしい。俺は親代わりだが年齢的には変わらないはず…

これがうわさのファザコンと呼ばれるものか！

まずい。このままだとっ、てそれは無いよなあ。さえない奴に誰が惚れるんだよ。

俺は一生独身を貫くんだ！恋人なんぞいらん！ハーレムもいらん！いるのは心の癒しだけだ！

強がり言う。もちろん心の中でだよ。

ジュエルシードは、ビンに詰められました。
だって触ると危なそうだし…

第十八話 スピードタイプには防戦が一番（後書き）

はいはい崩壊崩壊。

九個とか二十一個あるうちの九個とか…

九尾は主人公が喜ぶと思って持ってきたわけであり、悪意は無い。
どこかの最高神とは大違いですね。

第十九話 防戦しても手数で圧倒されると不利になる（前書き）

またタイトル関係なしという

第十九話 防戦しても手数で圧倒されると不利になる

あらずじ

九尾の善意に泣きそうになりました。

「でこれどうしようか。」

これとはもちろんジュエルシードである。

原作知ってれば対処できたのに、基礎しか教わらなかったからな……
ってそうだよ！最高神のところにに行けばいいじゃないか！！

「九尾行くぞ。」

「どこに〜。」

「最高神のところだよ。」

「くそつ。なんでいいところでガードするんじゃ！オートガードが
憎い！じゃが……見える！見えるぞ！！わしがこやつに勝つところが
……！！」

「ハイどーん。」

そういい、コンセントを引きちぎった。このとき抜いたのでなく引
きちぎった。だから……

「ちなみにするんじゃ。コンセン・ト……がつてええええええええ。」

こうなる。

「なんでコンセントがッ。返せ！コンセントを返せええええ。」

「ほい。」

「コタツのコンセントじゃないわ！このゲーム機のコンセントじゃ。」

「じゃあ九尾よろしく。」

「わかったー。」

「って管理者様！ナンデこんなに小さくなって……まさかお前幼女好「違えよつと。」ああ！本体が……粉々に……もう……わし……燃え尽きたよ……」

そっつい明日のジョー状態になっている。

「もってきたよーってどうしたの？」

「きつと悪い夢でも見たんだよ……悪い夢をね……」

「そっかー。でこれどうする？」

「思い切りぶつけてやれ。」

九尾に言つと思ひ切り最高神にぶつけた。

ゴスツと鈍い音がして倒れた。それはもう推理小説ばりに。

くしばらくお待ちください」

「いたた。で用件は？」

「これどうすればいいと思う？」

「さつさと捨てる。もしくは海へドーンじゃな。」

「よし。お前を海にドーンしてやる。」

「やるー。」

そういい、最高神を持ち海へ連れて行くために地球へ・・・

「分かった。分かったからおろしてくれ。腰が痛いんじゃ。」

「よしおろしてやる。1、2、3」

思ひ切り床にたたきつけた。ゴキツと言う嫌な音は空耳だろう。

「イタイ。わしの心がイタイ。」

「真面目に答えないのが悪い。」

「スマンのう。でそちらに居るのは隠しがつてスミマセンだからその手にある剣下ろしてください。」

「こちらに居るのは管理者の娘だ。名前はシンプルに九尾。」

「は？こうbってスミマセン刺さってます。先端刺さってるから痛い。痛い。」

「真面目に聞け。で一時的に預かっている。」

「幼女好きか。知らなかったんじゃが……」

「一回死ぬか？」

「スミマセン。」

とりあえず、話した。何故預かることになったか。ジュエルシードのこと。

「なるほど。命が狙われているから危険にあわせたくないという母としての願いか。」

「そうなりますねえ。」

「で、ジュエルシードじゃが九個って阿呆か。一日で九個とか。」

「そこが、おかしいんですよえ。一日とか、あんた聞いたとき一日ひとつでもきついと言ってたし。」

「流石、管理者の娘！わしにできない事を平然とやってのけるッ！そこにシビれる！あこがれるウ！」

「うるさいな。どうするか聞いたんだ。シビれとかあこがれとかい

いから。」

「簡単に言えばどこに渡すかじゃな。1 なのは、2 フェイト、
3 アースラ、4 プレシアどれにする？オススメは2か4じゃな。」

「どうせ原作ブレイクしたいだけだろ。1は他の転生者に睨まれるからパス、2も同じ理由、3は確実に捕まる、4は何か怖い、だから俺は5の自分で持つてるを選ばぜ！」

「馬鹿かお主は！持っていたら逮捕されて3のときより危険じゃよ。それでもいいのか？」

「悪用しなければ大丈夫だって。それにいざとなったらそれを取引材料として逃げるから。」

「じゃあ何でここに来たんじゃよ。来なくてもよかったのに。」

「暇だし、相談してから決めようと思った。それに久しぶりにここに来たかったし。」

「お主……いい奴じゃな。」

「まあ偶に会いにくるよ。じゃね。ほら九尾帰るぞ。」

「気をつけるんじゃぞ。お主が進む未来は一番きついと思う。頑張るんじゃぞ。」

「分かってるって。オリにもよろしく言うておいてくれよ。」

「うむ。伝えておくよ。」

「ばいばい。」

「うむ。九尾ちゃんも気をつけての。」

「うん！」

これからの方針は決まった、第四勢力として行こうか。

第十九話 防戦しても手数で圧倒されると不利になる（後書き）

第四勢力と言うのは、1がアースラ組み、2がテストロッサ組み、3が転生者組みなので4の化け物組みということです。化け物とか出てくるのだろうか…

第二十話 気づくとそこは知らない所で…（前書き）

これを書いてるときって年末の大晦日なんだぜ。

第二十話 気づくとそこは知らない所で…

あらずじ

新しい勢力として生きていくんだぜ！

「どうしてこうなった。」

現在俺が居るのは、アースラの中。どうしてこうなったか思い出してみよう……

あのあと帰ってきたら驚いた。時間の進みが速かったのだ。その時間おおよそ4～5日。

まずい。そう思った時には時すでに遅し。

終わっていたことをあげると

旅館の所。テストロッサさんとの戦いだっけ？どうなったのだろうか。

町の中での強制発動。

これぐらいが神から聞いた所だろう。

関係なし。興味なし。といえないんだよねえ。

全く、関係するということはめんどくさい事なのに…

「何故公園で遊んでいたら木が大きくなるんだよ。だれか説明プリズ。」

と思ったら結界が張られた。まあ当たり前だろうね。その間に木はじんめんじゅ見たいになってるし、と思ったら後ろに誰かいた。白い服装に杖を持ったツインタールの人。げ、高町だ。

ステルスで姿を消しつつ隠れる。

杖でじんめんじゅにホームラン予告とか…

そう思っていたら上から金色の魔力弾が飛んできた。

しかしじんめんじゅはガードする。堅いなあれ。というか他の転生者はどうした？普通くるだろう。

「オオオオオオオオオオ」

叫ぶなじんめんじゅよ。うるさい。

ほら九尾泣きそうじゃなか。泣かしたらここからぶった斬ってやる。

なんかあちらで、オレンジっぽい狼？みたいなのと金髪マントさんが喋ってる。おそらくバリアのことだろう。

ちよ、戦ってるとき他の所見るとか馬鹿なのか？ほらハードプラントみたいな出したじゃないか。

もう、九尾がプルプルふるえて服の一部を強く握ってるよ。可愛いなあ。

杖ってしゃべるんだ？知らなかった。それに空を飛ぶとか、魔法ってすげー

ってかなんでお二方はやる気満々なんですか？

なんで斬撃飛ばしてるんですか。それに高町さんどうして杖を構えてるんでしょうか。

ちよっとなんだよアレ！おかしいだろ。レーザーのようなもので出てるって。

ほら泣きそうなんだって、九尾泣くな耐えるんだ。

そしてレーザーによりめり込むじんめんじゅ。見てると可哀想になってきた。

おいおい二人掛りでレーザーとか酷すぎるだろう。

じんめんじゅが光ってるって。

なんだ？進化でもするのかよ。と思っていた時がありました。
出てきたのはジュエルシードですね。

うおっまぶし。

とりあえず、泣かずにすんだな。めでたしめでたしだな。

だが運命はいつでも残酷なんだということだけは言っておこう。

二人がいつの間にかぶつかり合う直前、眩しい閃光と魔方陣からそいつはやってきた。

「ストップだ！」

そう言い、二人の杖を受け止める誰かがでてきた

「ここでの戦闘行動は危険すぎる。」

いや、九尾が泣いたときの方が危険だからね？たぶん俺でも抑えられないよ。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか。」

「う・・・う・・・うう・・・」

やばい泣く、泣いてしまう。

「うわああああああん」

泣いちゃったよ。まずい。

「誰だ！」

「誰だじゃねえよ！九尾泣かしたのてめえだろうが」

そういうと同時に太刀に思い切り怒りという欲を籠める。

「どこかにきえされえええ」

そついい思いつきり太刀を振るう。

あの馬鹿はそんな所から何してるんだといわんばかりに動かない。
だが、それが命取りだ。

「え」「

そつ杖を受け止められていた二人が言う。なぜならば……

そこに居たはずの馬鹿が消えていたからだ。

第二十話 気づくとそこは知らない所で…（後書き）

所々疑問なのはあまり深く知らないからです。
そして次回に続くという。

第二十一話 やったことは仕方ない。その後どうするかが問題だ（前書き）

前回一方的な地の文だったのは見ていたときに次々色々なことが起きたからです。

第二十一話 やったことは仕方ない。その後どうするかが問題だ

あらずじ

九尾を泣かした馬鹿を空間ごと引き裂きどこかに飛ばしました。

「ほらほら泣くなよ。九尾さんお願いしますから。何でも言うこと聞くから。」

何度こういったか。あいつを何処かに飛ばしてからだから数十回は言っているだろう。

その間、二人の魔法使いと一匹の狼？それにフェレットと呼ばれるものは硬直していた。

なぜなら、目の前に居たものが一瞬で消えたからだ。その頃のアースラ内部でも沈黙と硬直が続いていた…

「泣き止んでくれ。ホントに。何でもするから。」

そのとき、九尾が泣き止んでくれた。しかしニタァという擬音が聞こえてくるような笑みを浮かべて

「じゃあ、一緒に寝て！独りは嫌なの！だから一緒に寝て！」

「それぐらいなら大丈夫だろう。良いよ。」

子煩悩？親馬鹿？可愛い娘のために必死になる事の何が悪い！

でも、見た感じ8歳の子供が4歳程度の子供にヘコヘコするとか…

・・・

「そのころのアースラ内部」

「急いで彼の行方を捜して。」

とばたたと忙しなかったという。

「海鳴臨海公園」

「みんな呆けてるうちに帰ろうか。」

「そうだねえ。」

すこくにやけながら返答する九尾。やっぱり可愛いなあ。

「おっと。その前にあの馬鹿回収しないと……」

あの馬鹿とは大事な九尾を泣かした奴だ。回収しないと何処か遠くに行っちゃうからな」

「しばらくお待ちください」

よし、何とか見つかった。でもどうしようか…

「ねえねえ見て見て、ジュエルシード」

「おい馬鹿！持ってくるな持ってくると……ほらあ！」

金髪マントの奴来たじゃんか！しかも杖が鎌になるとかどうするんだよ。

「それをこちらに渡して。」

「渡さないと……」

いや、渡さないとうなるんですか？そして狼喋ってる。あ、九尾も喋るか。

「分かりました。じゃあどう「あげないよ！」うえええええ、ちよ、これ九尾いらないものだから！九個で十分だから、そこにいる子に渡しなさい！」

「渡しちゃうの？」

泣き目でこちらに聞いてくる。カウユス……ってそんな場合じゃないよなあ。

相手さん殺る気満々だし。腹くるかねえ。

「よし、ならば俺のバリア破れたらって話聞けよ。」

「バルディッシュ」

「yes, sir」

いやいやイエスでもサーでもないから。

「ちょ何で突撃してくるの？痛い、痛い九尾首絞めるな。」

はつきり言おう。これ破れることって無いんだよな。流石に魔王の名は伊達じゃないと言っ。

「光の玉でも持って出直してこいよ。」

とりあえず、反射機能はオフになっている。しかしその分硬くなる、広くなるだからなあ。

「もう諦めるよ。いまならジュエルシード渡すから。家に帰って飯作らないとって話しきけよお」

「やつちやええ。」

あおるな娘よ。そしてさよなら。見知らぬ金髪マントよ。

「何処にでも飛んでいけ。ジュエルシードよ。」

そついい、ジュエルシードをぶん投げる。

危険？九尾が危険な方が俺には耐えられない。

「ということがあったのさ。」

「君は誰に向かっていつているんだ？」

「今の心境を整理してただけだよ。」

現在、アースラ内部にて高町さんとフェレットが人間になったユーノと呼ばれる人と馬鹿と同じ場所にいます。

ユーノさんって九尾と同じかな。動物が人になる、人が動物になる

ができるから。

「なあ。どうして俺まで行かないといけないんだよ。帰らせてくれよ。ようがあるのは高町さんあけだろう。」

「そういうわけには行かない。艦長の命令だからな。」

そういわれて来たのは艦長の部屋らしい。

部屋を見た感想は、日本を勘違いした外国人と言っ所だろうか。なぜ、盆栽がある。茶釜がある。ししおどしがある。絶対おかしいだろう。九尾そんなそわそわするな。

「おつかれさま。まあどうぞどうぞ。楽にして。」

そう言われたのでひざの上に九尾を乗せて座る。

そこからの話はよく分からなかった。ジュエルシードを発掘したのがユーノさんで回収しようとしたとか。

「あの、ロストログアって、何なんですか。」

おい、それを聴くのかよ。まずい、ばれる。

そこから聴いたのはオリエアとあまり変わらないものだった。

「使用法は不明だが使いようによっては世界どこか次元空間さえ滅ぼす力を持つこともある。危険な技術。」

技術と言っより、妄想の産物、空想の産物なんだが……

「然るべき手続きをもって、然るべき場所に保管されていなければ

いけない品物。」

オリエアてめえそんなもの持たせたのかよ。

「あなたたちが探しているロストロギア、ジュエルシードは次元干涉型のエネルギーの結晶体。幾つか集めて、特定の方角で起動させれば空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物。」

あゝ、そんなものが九個もあるんだ。絶対つかまるだろう。

そこからは話が頭に入ってこなかった。考え事しているから当たり前か。

「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます。」

「君たちは今回のことを忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい。」

「分かりました。答えはイエス。だから早く返してください。」

「じゃあ君の持っているロストロギア全部置いていってもらおうか。」

「なぜ？」

「危険物だからだ。早く出してもらおう。」

「仕方ないなあ。ほれ。」

そういい、太刀、小太刀、木刀を馬鹿に向かって投げる。
しかし忘れているのだろうか、俺以外の人が触ると…

「がああああああ」

こうなる。かなりの痛みらしい。叫びでわかる。

九尾が泣きそうだから取り上げた。

「俺以外の人が触るとこうなるんですよ。だから渡したくなかったのに。」

「それを分かっていて出しのかしら？」

「だって、危険物で保護しないといけないとかさっきの話で言ってたから出したわけで…それで何してるんだ。と申されましても。」

「早く帰ろうよ。」

「九尾まあまで。三つ回収してからな。」

そういい、三つとも手に持ちいつもの通り腰に掛ける。

「あなたはなんともないのかしら？」

「そんな事知るわけじゃないですか。そもそもこれが危険物とは知りませんでしたから。」

まあ、全部嘘だけだな。

「じゃあ帰ります。九尾行くぞ。」

そう言うと思い切り太刀で空間を切り裂き、自分の家まで空間をつなげた。簡易式ワープだ。

「それじゃ、皆さんさようなら。」

そう言い家に帰った。今日の夕飯何にしよう？

第二十一話 やったことは仕方ない。その後どうするかが問題だ（後書き）

長い・・・書きたいこと書いたらこうなった

第二十二話 森と山でのエンカウント率は異常（前書き）

はははきえたきえたよ。

投稿しようとしたらできませんとか、大晦日にやるのがいけないのか。

ああ、鬱だ

第二十二話 森と山でのエンカウント率は異常

あらずじ

アースラに行きました。え？ジュエルシード？九個ありますよ？

「やっちまった。やっちまったよ。これで立派な犯罪者だ……
あはは、笑うしかないよ。」

時空管理局って警察みたいなものだよね…

「元気だして、これあげるからー。」

そついい九尾が出したのは青い色をしたひし形の石で……つてあれ？

「俺ぶん投げたよな……それを追って金髪マントと狼から逃げたわけだし。」

「かんだんだよー。偽物を作ればいいことだからー。」

「語尾伸ばすのやめろ。そして偽物って何だよ？」

「偽物は偽物だよ？世界の管理者の娘にふかのーはない！」

「はいはい、自慢自慢」

でもどうするか。ジュエルシードって二十一個、その中の半分の十個は俺が持っている…

あ。終わった。金髪マントがもしこのことに気づいたら殺されるし、

アースラ組にもばれたら最悪身柄拘束だろう。

「よし、逃げよう」「きゃあ」「ってど・・・う・・・し」

そこから先は言えなかった。なぜなら…

顔が泣きすぎてはれている最高神オリエア、苦笑いのオリ、ビキビキと音が聞こえてきそうなほどお怒りでいらっしやる九本の尻尾がある年上の女の人が九尾を抱えてこちらを見ている。

「OHANASIIか、天獄に逝くか。どちらがよい？」

「もちろんOHANASIIで！」

オリエアとハモリりつつ土下座をする。怖くて頭を下げたまま上げられない。

「もう一度言う。OHANASIIという肉体言語と精神ダメージか、天国に居るのに地獄のような苦しみにもだえる」のどちらがいい？」

「OHANASIIで」

天獄とか最初漢字が違うと思ったがそのままの意味だとは…

「OHANASII中」

「おいオリエア、生きてるか」

「生きてるが死にそうじゃ」

「そこ！念話で会話するな！」

「読まれたのか！」

「わしより上の管理者じゃよ？心を読むのは簡単じゃろ。」

「おだてても意味ないからな。」

「懲りずにOHANASI中」

「ああ、死んだ妻が川の向こうで手を振りながら叫んでる。なに？
く・・・る・・・な・・・ってなぜじゃああああ」

「うるさい。」

「オリエア三時間追加」

「そんなあ。」

「OHANASI終了（オリエアあと三時間）」

「何故怒られたんですか？」

「あいつはまた書類ミスをして勝手に転生させたんだ。まったくこの世界にさらにお前と同じ歳の転生者が増えるぞ？だからあんな風に罰を与えるんだ。」

「でも、目の前で無邪気にゲームデータのアイテム消し、その後セーブデータ消去、メモリー粉碎、バックアップ削除、ロムとカセット破壊、続けて本体破壊はきつくないか？」

九尾がきやつきゃっ言いながら次々オリエアのデータを台無しにしていく。オリは苦笑い。

オリエアは、わしの嫁が・・・嫁が・・・とか言ってるし。あんた妻が居たんじゃないのか？

「俺は何故怒られた？」

「娘を泣かせたでしょう？そして娘を危険な目にあわせたこと。そしてジュエルシードあんなに持つてるって馬鹿なの？」

「全部あなたの娘が持つてきたんですが・・・」

九尾は泣き目になりこちらに来る。可愛いなあ。すごく癒される。

「私だめなこと・・・したの？」

「そんな事ないわよ。本当に！」

すごい慌てて誤解を解く。こいつも親馬鹿で子煩惱とか。世界管理できるのか？

「大丈夫よ。世界なんて独自に進んで勝手に滅んでまた進むんだから。それよりきついのは、転生者が増えたせいで私の管理者と言う席を狙ってくる奴が多いのよ。」

「じゃあ最初に出会った時の傷は・・・」

あ那时的酷い傷を思い出す。

「そうよ。狙ってきた奴らに不意打ち食らったからね。」

「はあ、そうですか。じゃあ娘を預けたのも。」

「そうよ。危険な目にあわせたくないため。身勝手なことだと思うけど。」

「親が子を思うことは当たり前だと思いますよ？特殊な場合を除いてですが・・・」

「おかーさん。もう帰らないといけないの？」

・
そう九尾が言う。そっかここに来たということは引き取りに・・・

「そんな事ないわよ。一緒にいたいのでしょうか？だったら娘の願いを聞き入れるのは親として当たり前よ。」

そんなことを言う。恥ずかしい。とても恥ずかしい。

「オリは何で来たの？」

「親父の付き人。そしてひとつの終わりを見届けるために。」

「そうじゃよ。最高神自ら出てきたのじゃからな。」

「終わりって何が終わるんだよ。」

「全ての歪みが一度終わるのよ。それを見届けるために、全世界の管理者の私、イステールと」

「この世界の管理者オリエアと息子のオリが来たというわけじゃ。」

終わりか……色々合ったよなあ。

転生して、親に会って、楽しく暮らした。

でも親が死んで絶望して憎悪して裏切られた気がしたよなあ。

それで、九尾と会って、一緒に暮らして、ジュエルシードってアレ？意外に短かったなあ。

「それを人、死亡フラグと言う。」

「え！死んじゃうの？」

「俺は化け物だから死なないって、久しぶりに化け物っていったなあ。」

さてと逝きますかね。崩壊したものをゼロに戻すために。

第二十二話 森と山でのエンカウント率は異常（後書き）

毎回タイトル関係ないという。

第二十三話 ト라우マ（心的外傷）（前書き）

物語は置いてきた。深く関わるのはいつも最後だけ。

おいしいところ全部持っていくんだ！

そして原作が壊れるのが嫌と言う人は見ないほうがいいでしょう。

第二十三話 ト라우マ（心的外傷）

あらずじ

世界の管理者の名前を知り、死亡フラグが立ちました。死なないけどね！

「俺が死ぬのは、化け物じゃなくなっただけだ！」

「急に叫んでどうした？」

「頭がいかれたのじゃろ。」

「きつと娘の可愛さに頭をやられたのよ。」

「ハアハアいいながら言われても説得力に欠けるんじゃないが。」

「いいように言っているのは上から、俺、オリ、オリエア、イステール、オリエアだ。
九尾は寝ている。それよりも…」

「何でここで張り込みしてるんだよ……」

「ここで名シーンの数々が生まれるんじゃないから黙って待ってろ。」

そんなことを言われた。こっちは何も知らないっての。

「ほら、始まるぞ。」

そう言われて見ると高町さん、オレンジっぽい狼、フェレットと公園灯の上に金髪マントがいた。
となりで、

「生なのは、生フェイトハアハア。だが淫獣。てめえはだめだ。」
といいながら目が血走り、顔は真っ赤になっている。淫獣って誰だろう？

「ひい、ふう、みいつて高町さんが五個、金髪マントが九個、俺十个、あれ？足すと二十四とか。」

「簡単じゃよ。九尾が作った物も偽物じゃから三つ偽物があるということじゃろ。」

「三つて多くないか？」

「そんな事ないじゃろ。アルハザード行くには必要だし。」

「アルハザードってなんだよ。」

「忘れられた都市。またの名を管理者のおもちゃ箱。」

「「は？」」

おお、オリとハモツた。

「なんだよ親父。おもちゃ箱って聞いたことないぞ。」

「機会がないからの。ゲームで言うとデバックルーム。色々な能力を管理者が作った能力を保管するんじゃない。ちなみに製作者イステール、わし。管理者イステールじゃよ。」

「親父、後ろに気をつけろよ。」

「なんじゃよ……って、アッーーーーー」

断末魔が聞こえた。合掌。

「イステールさんなんて物創ってるんですか。」

「だって何億って生きて世界を見るのってつまらない物なの。だから創った。後悔してない。」

「そうですか。」

その前にあの戦いすごいよなあ
魔力弾撃ち合いながらかわしつつ、さらに出すとか。
魔力弾を叩き消すとか。勉強になるよなあ。オリはうんうん頷いてるし。

でかい魔方阵を金髪マントを描いている。高町さんの周りにも魔方阵が出てくる。

「魔法ってすごいよな。」

「そうだな。だがお前は魔法もどきなら使えるだろう。」

「魔力のない魔法は魔法じゃないと思うけど。」

「だったら、娘と契約すればいいじゃない。魔力供給してもらえ
わよ。」

「魔力じゃなくて神通力じゃなかったか？」

「細かいことは気にしないのオリ君。」

「なあオリ、神ってキャラ簡単に変わるのか？」

「仕事と私事の区別してるんだろう。親父も見習って欲しいよ。」

まだ、オリエアはがんばれ。だとか、負けるな。とか言ってるし、
どんだけ好きなんだよ。

「おお、フォトンランサー・フランクスシフトじゃ！スゴいのう。」

「でも無傷とかおかしいだろう。」

「それはきつとなのはちゃんがすごいからじゃろう。」

そうだ。無傷って事は防御型か？そうしたら攻撃は手数より一撃の
方がいいのか？と思う。

でも、戦闘狂じゃないし、バトルジャンキーでもないからね。

「ここからがオーバーキルなんじゃよなあ。」

そう呟きが聞こえたので見る。

そこには、桃色のレーザーをバリアで防いでいる金髪マントがいた。

「おお、防ぎきった。」

「まだじゃここからがトラウマにもなる地獄じゃよ。」

高町さんがまた魔力を集めていた。

このとき最高神は後にこういう

「あの桃色の光線に飲まれたらいやじゃのう。非殺傷だから苦しむし。また生で見ると迫力が…」

と他の神に伝えるのであった。

金髪マントが桃色の光線にのみこまれた。

「海がすごいことになっている。これって現実？」

「現実だろうね。」

俺の疑問はオリとイステールによって肯定された。

第二十三話 ト라우マ（心的外傷）（後書き）

アルハザードについては見た感じ“神ならいけるって”見たいに崩壊させました。

おもちゃ箱というのは、管理者が適当作った能力の宝庫だから時を操り、死者さえも蘇らせるなんてのは簡単にたくさんあるんです。原作好きの方スママセン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7367z/>

魔法少女リリカルなのはって何？

2012年1月8日12時52分発行